
転生した先は...リボーン！？

霧宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した先は…リボーン！？

【Nコード】

N7854W

【作者名】

霧宮 海

【あらすじ】

ある日、オレ、霧沢蒼は倒れた。そして目が覚めたら真っ暗な空間。そして変な男。その男はオレにこう言ったんだ。「あんた…死んだぜ？」それがすべての始まりだった。オレはなんだかんだでリボーンの世界へ行くことになり、生活をやり直すこととなった。しかもなんかオレ以外にも転生者がいる！？これからやっていけないかなオレ…。さてさて彼女が見るのは天国なのか、地獄なのか。

登場人物

登場人物

霧沢 蒼（キリサワ アオ）

性別：女

ファッション：黒のフード付きパーカの下に白いタンクトップ、迷彩柄の七分丈ズボン。

銀のチョーカーがお気に入り。

髪：黒で胸くらいまで。だいたいポニーテール。

身長：165cmくらい

一人称：オレ

性格：クール。でも仲間と認めた者には気さく

好きな性格：決めたことはやる人。仲間を大切にする人。癒し系の人。

嫌いな性格：熱血君。偽善者。

帝（ミカド）

性別：男

髪：フツアの髪型 雑ですいません。 明るい茶色

身長：170cmくらい

性格：明るい、意外と世話焼き。

好きな性格：ノリが良い人。

嫌いな性格：ムスツとしてる人

浅野 望（アサノ ノゾミ）

性別：女

髪：ボブ。焦げ茶っぽい色。

ファッション：かわいい系。常にスカート

身長：155cmくらい

性格：明るい。みんなと仲良くなりたい。漫画リボーンが大好き。

好きな性格：みんな好き！

第1雨

オレ、死にました

あー。こんにちは。霧沢蒼です。ただいま人生の危機です。マジで笑い事じゃなく。

オレ…五日間何も食ってないんすよ。

いやね？ダイエットとかじゃなくさ、親が仕送りしてくんねーんだよ！

一人暮らしの蒼に仕送りなしはきつい。

もうちょっとで家かー！。うー。水ー！水飲んでー！夏暑すぎだろ今年！

…あれ？なんか視界が…逆さま？

？？蒼はその場に倒れ込んだ??

「…い。おい！おい！」

「うおあ！？」

蒼が飛び起きる。オレの目の前には男。待て。状況が把握できない。なんだこいつ。

なんかすんげー神サマみてーな格好してる。てかここドコ？周り真っ黒で現実味ねー。

ポーゼンとしている蒼を前に男がバツが悪そうに言う。

「あ…。なんかパニックってる途中悪いけどさ。アンタ死んだぜ。」

蒼、固まる。男、引き笑いし、斜め上を見ながらポリポリ頭をかく。

「はあああ—————！？」

ドコだかわからない空間に蒼の声が響く。

「ち、

ちよつと待つてよ。死んだ！？death?die!?そんな、空腹で死ぬとか…情けない…」

「まあ、どんまいだ！」

そう言い、男が蒼の肩に手をかける。

「黙れ！おまえにオレの気持ちかわかるか！最後の晚餐がパンのミニ…せめてご飯が食べたかった…！」
うなだれる蒼。

「なあ、転成できると言ったらどうする？」

「は？」

「いや、同じ世界は無理だがオレの力を持つてすれば『家庭教師ヒットマンREBORN』の世界に行けるのだ！」

男が偉そうに言う。

「いや、いい」

「遠慮すんな」

「遠慮してねーし。』『うぜーんだよ」

「いやいや、え？フツーさ『リボーンの世界に行けるの！？マジラッキー』『っていう反応が返ってくる

はずなんだけど」

蒼があきれた顔で答える。

「オレそのリボーンってやつ知らねーし。てかお前何？」

「『何？』って…せめて『誰？』にしてほしかった…まあいい！オレは神のひとり帝だ！」

帝が言い放つ。蒼は別に驚きもせず腕を組んで立っている。

「ふーん。」

「…もつと驚こうよ」

「驚いてるよ？神サマっていったら七福神みたいなじいさんしかいないと思ってたから」

「いやそつちじゃなくて…」

今度は帝がうなだれる。

「別に死んだらしいし？そんなのがわかるんだったら本当だろうよ。話を戻す。オレはそのリポーン

の世界には行かない。」

「行かなくちゃいけねーんだよ」

帝は急に真面目な顔になる。行かなくや行けねーって、んじゃ聞くなよ！…まあ続きを聞いてみよう。

「なんで行かなくやいけねーんだ？」

「まあながくなるんだが、お前があのととき死ぬはずじゃなかったからだ。お前はあの後家に着き、ポスト

を見ると親からの手紙とお金を見つけるんだ。んで食いもんを買う。でもなんでか死んじまった…」。

そういう場合は他の世界でやり直さなきゃならねーっつーわけ。まあオレも行くし安心しろ！」

不安にしかなんねーよ。

次の瞬間とある部屋にいた。

「ここがオレらの家だ！もちろん他にも部屋はあるぞ。ここは蒼の部屋だ。」

「へー。ほぼモノクロの部屋か。気に入った。」

「そら良かった。この世界ではオレらしいとこっていう設定だから。よろしくな」

「ああ。」

「そーだ。これ。」

そう言い帝が渡したのは…メガネ。オレ視力確か1.7はあるんだけど。

「オレ視力には自信あるんだけど。」

「フッフッフ。ただのメガネじゃないのだよ、蒼くん。それはパソコン、原作漫画、地図など…」

様々な機能がついてるのだよ！」

なにそれ。ドラ もん的なアイテム？

「は？イミフー」

「んー。じゃあ『リボーン』の原作が読みたい』って思ってみ」

…うわ。なにこれ。物語が頭ん中に入ってくる。その後2、3分でオレはすべての話を理解した。第一の感想。

「…これ。オレまた死ぬだろ」

「だいじょーぶ！策はある！」

さっきのメガネは確かにスゴかったけど今度はどうだかなー。

「なんと！蒼の戦闘能力、運動能力がアップしているのだガハッ
ッ」

ドンッッッッ！！

説明しよう。帝が自慢げに話している途中に蒼が帝にドロップキックをかましたのだ。

「あーほんとだわ。壁にヒビはいつてる。アンタほんとに神かも」

「（神サマにドロップキックしてもいいんですか？）」

???その後帝復活???

「蒼。明日から学校だからもう寝ろ。制服はなんか前の世界で男用
着てたからそっち貰っといたぞ？」

「助かる。スカートなんて履けるかっての。」

帝が部屋を出て行く。

蒼がスカート履いたら結構かわいいと思うんだけどなーと思った帝
だった。

第1雨

オレ、死にました（後書き）

リボーンの人たちが出てきてなくてごめんなさい！次はきつと出ます！…たぶん

第2雨

オレ、初日から遅刻ー！？

ピピピピピピピピピピ

なんだよ、うるせ？なー

寝返りをうつ。

ピピピピピピピピピピ

「うるせーってんだろーがあー！」

バキッ

「あ。壊れた。」

哀れな目覚まし時計よ、安らかに眠れ…

ちよっと待て。オレはいつも授業の始まる10分前に目覚ましが発鳴するように設定している。おい。

…てことは……遅刻だあ！！！！

急いで制服を着、髪を結び、黒の半袖パーカを着、荷物を持って飛び出した???

ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ

くっそー！帝のやつ起こしてくれても良ーじゃんよお！

「覚えてる???」

あ、校門が見えてきた！門は…閉まってるー！飛び越えるしかないな。そんでたしか教室はあの辺！

二階くらいだったら飛べんだろ！奇跡的に窓も開いてるし？こっから入ってくれて言ってるようなもんだろ？

門の前になんかいる。腕に腕章？まあいーや。飛び越えようとした時、話しかけてきた。

「君、待ちなよ。」

「わりい、急いでんだ、よっ！」
門に乗り、一気に蹴る。

スタッ

「フー、着地成功！」

うまく窓の所に着地できた。正ー直うまくいく自信がなかった。あ、クラスの人たちびっくりしてる。

帝は…あきれてる。

どーしよ。何言えば良いかわかんねー。

「あー。遅刻してすんません。霧沢蒼です。一応女です。オレの席はドコですか？」

キヤアアアアーーーー！！！！

女子たちが一気に沸き立つ。うるせー、なんだってんだよ。

「先生！私の横！私の横空いてます！」

「こつちだつて空いてます！」

騒ぎだした生徒たちの声でようやく我に返り、生徒を静める。

「静かにしなさい！今日は本当に転校生が多いな……。霧沢は獄寺の横がいいな。」

獄寺……ああ爆弾野郎か。

「うーい。」

そう言い席に向かう。他の生徒からはブーイング。
先生もかわいそーに。

席に着き、うつ伏せに寝る。獄寺がこんな感じってことはもう沢田の下についた後か。見学しようかと思ったのに。

さつきから何なんだろ。獄寺がずっと睨んでんダケド…。視線が背中
中に刺さるゝ痛いよー。

授業中ずつとこんな感じかよ？

「あー今日は転校生がいるからー、二時間目は自由時間だ！教室内
だったら遊んだりしゃべっていいぞ！」

生徒がまた沸き立つ。たしかにこの様子じゃみんなメモ回しまくっ
て授業にならねーだろ。

先生ナイス！獄寺の視線から逃げ出せる！…そして帝にもちよっつ
つとだけおしおきしないとね？

蒼が席を立つ。ふいに腕がつかまれる。獄寺だ。

「なんだ？何か用でも？」

「昼休み、屋上に来い。」

それだけ言つと、沢田の方に歩いていった。なんだ？かつあげ？イ
ジメ？まあ行くつきやないよなー！

それより今は……………帝君の方だね

帝も転校生だから生徒たちに囲まれている。ちよつと邪魔。

「はいはいごめんねー。ちよつと通してねーはいつ失礼」

生徒をかき分け帝の真正面に立つ。帝、冷や汗だらだら。

バンツ！！

机を叩き、満面の笑みで問いかける。

「帝クーン？どゆこと？起こしてくれてもいいーじゃんよお！」

その言葉で一気にざわつく。え。なんか変なこと言ったか？帝は頭を押さえ、またまた呆れ顔。

「なにそれ、二人知り合いだったの?!」

「てゆーか同居!?!」

「同じ部屋で寝てたりして！」

…なんでそーなる。皆さん妄言…いやいや想像力ありすぎ。

「ちがうちがう。オレらただのいとこ。オレの親たちが死んだから帝の家に住んでんだ。それだけ。」

みんながっかり。変なもん期待すんなー。まあそんなことどうでもいい。オレはもう一つ聞きたいことがあんだよな。

帝の襟を掴み、帝にしか聞こえない声の大きさを言った。

「おい。どういうことだ。『浅野望』なんて知らねーぞ。あんなやついなかっただろ」

そう、原作にはいないはずの人間がもう一人いたのだ。

「あーばれた？だつてさ、一年間も『リボーン』の世界に行きたいです』とか願われてさ他の神サマから

も『叶えてやれよ』とか言われて！耐えきれなかったんだよ！」

…アホか。なんかもーいや。めんどくさい。

「もーいーよ。アンタに聞いたオレが馬鹿だった。」

そう言つて蒼は自分の席に戻り、寝た。

?? 昼休み??

すみません!

屋上に来いって本当なんだろ。

蒼は屋上へ向かっていた。学校の地図は大体頭に入っている。

ガチャ

ドアを開ける。獄寺はもう来ていた。相変わらず睨みつけてくる。

「何の用?もしかしてかつあげ?オレいま野口サン二人しかいないんだけど。」

とりあえず笑って話しかける。

「しらばっくれんな。テメー何処のファミリーのもんだ！」
あーそういうこと。

「んー。ただの一般人でーす」

「二階の窓から入ってくる一般人がいるか！」
…ごもつとも。

「じゃあどうすれば信じてもらえんの？」

「オレと戦え！何処のファミリーかも知れねえやつを十代目のお側に置けるか！」

それってボコられたら信じるってこと？まあケンカは好きだから受けるけど。

「いーよ。そっちもダイナマイト使っただしこっちも武器使っくいよな？」

「かまわねえ」

蒼が帝に貰ったクナイを出す。

「これでアンタを刺すことはないから安心しな。消火用だ」

「なめんな！2倍ボム！」

うわ。いきなり攻撃してきた！ホント何処からあんなにダイナマイトだしてんだろ。

四次元ポケット？

「うかせ雨風！」

蒼がクナイを放つ。

「なっ！嘘だろ…！」

獄寺が投げたダイナマイトの火がすべて消えてしまったのだ。そしてダイナマイトは失速しポトポトおちる。

「…これで無駄だったことがわかった？」

「クソッ…」

獄寺が膝をつく。蒼は獄寺を見、屋上の柵の方に歩いていく。

「もう戻ってもいいよな？」

「まだだよ」

そう言って屋上に現れたのは……

雲雀恭弥。

第2雨

オレ、初日から遅刻ー！？（後書き）

なんとか少しキャラクター出せましたねー。良かった良かったー（笑）

第3雨

オレ、雲雀と戦う!?

あいつは確か…雲雀恭弥。風紀委員長にして並盛最強の男…か。

ぶっちゃけ自分が風紀乱してるっていうね。そんな男がオレに何の用だ？

「まだだよって、何が？今の見てたよな？獄寺はオレに負けたの。これで終わり。さよーなら。」

そう言い蒼がまた屋上のドアに向かう。

ヒュンッ

「！」

雲雀がトンファーで襲いかかってくる。蒼がとっさに避ける。いきなり理由もなしに襲いかかってくるなよ！

「オレがお前と戦う理由はないけど？」

「君、今日遅刻したね。風紀を乱したやつは……かみ殺す」

…は？噛み殺す？不可能じゃね？何こいつ実は前世ライオン？雲雀とかいう名前だから前世は鳥と思った。でもなんか門の前通った時に話しかけられた気もするんだよね！。

「よくわかんないけど…ケンカなら受けて立つ…！ケンカは好きだしな！」

「どうでもいいよ。」

そう言つと雲雀が攻撃を仕掛ける。

蒼はその攻撃を容易く避ける。

「はーずれっ」

「まだだよ。」

雲雀はトンファーから鎖を出し、振り回す。

蒼はその攻撃もヒラヒラと避ける。獄寺は呆然と戦ってる二人を見ている。

「またはずれ。なあ雲雀サン、あんたオレを倒す気ある？」
蒼が雲雀を挑発する。

「そういう君こそ武器を出しなよ…!!」
雲雀は少しずつ息切れし始める。蒼はまだ余裕の表情。

「それじゃあ…お言葉に甘えて

とどめを刺させていただきます」
蒼がクナイを取り出す。

「雨風」

蒼がクナイを投げる。それを雲雀が弾く。
雲雀が安堵のため息をつく。

「甘いよ雲雀さん。甘すぎる」

蒼は雲雀の背後に高速移動し、クナイを投げる。

「雨菊あめくき！」

蒼が投げた大量のクナイが菊の花びらのように雲雀の背中に突き刺さる。

「！」

ドサッ

雲雀が膝をつき、倒れる。

「オレに勝ちたいならもつと強くなってよね」
そついい蒼が屋上から立ち去る。

しばらくして雲雀が立ち上がり、クナイを抜き、屋上から出て行く。

残された獄寺はやっぱり呆然とするしかなかった。
「雲雀に勝つなんて…」

「あいつ何者なんだ？」

雲雀は応接室に向かう。
「霧沢蒼……気に入ったよ」

蒼は家に向かっていた。疲れたしいーよね？
ていうか、… やっちゃった…… ボンゴレの守護者になるやつとケン
カしても意味ねーじゃんよお！！

心の中で叫びながら家に向かう蒼だった。

一方帝は五時間目にボロボロになって教室に帰ってきた獄寺を見て、
だいたい察した。

蒼のやつ……………

また暴れたのかよ！！！！！

帝君の苦勞は続く?? ?? ?

クシュンッ

「んー、だれか噂してんな。…ティツシユティツシユ…」
ソファに座りながらそうつづぶやく蒼だった。

第3雨

オレ、雲雀と戦う!? (後書き)

戦い書くの苦手ー！ホントすんません！

イヤ、読むのは好きなんですよ？でも書くとなるとね？

そーだ。雲雀さんファンの人、ごめんなさい > ((<

第4雨

オレ、人の命救ったかも…

おはよーございます。霧沢蒼です。

なんと、今日は！

「遅刻しなかつたんですー！」

両手を挙げて蒼が叫ぶ。あ、声に出ちゃった。そういえば今授業中だっけ。先生の笑ってる口の端がヒクヒクしてる。あちゃー。

「霧沢。授業中だ。叫ばない！あと言わせてもらつと遅刻しないのはあたりまえだ！」

「すみません。授業中ということをお忘れていました。あと言わせてもらつと遅刻しないことはオレにとって当たり前じゃないんです！」

そう宣言し蒼が座る。

そんなことを宣言してくれるなー！

…そんな帝君の叫びは誰にも聞こえることはなかった…

そういえば今日は山本とかいう奴が自殺しようとする日だっけ。

言わせてもらおう…自殺しようとするやつは一回死んでからそういうことを考える！…あれ？死んだらダメじゃん。んー、オレも自分で何言ってるかわかんなくなってきた。きちゃった。

まあそれはおいといて。見学にいきたくないなー。

あれって時間いつ？漫画読んでもわかんなかった。沢田より早く屋上に行かなきゃだし。多分午後だよな？

よし、午後の授業サボろう。

…あいつ……絶対なんか変なこと思いついた!!!

表情で大体何を考えてるかわかってきた帝だった。

???in屋上???

んー、まだ来ないのか？読書も飽きてきたんだけど。寝ちゃうぞー。

ガチャ。

山本が腕をつるして入ってくる。確か野球で行き詰まって沢田に相談した。そしたら「努力しかないんじゃない？」的なこと言われ、自主練して骨折したんだっけ？

オレは沢田に努力とか言われたくねー……

てゆーか沢田に相談しねー！。

そんなことを思ってるうちに山本が屋上の柵を越える。あーあ。死んだ身にもなってみろよ。生きてるだけうらやましいもんだぜ？

山本に近づいていく。山本はまだ蒼に気づいてないらしい。

「山本武。あんた死にたいの？」

微笑みながら蒼が問いかける。山本が一瞬驚き、振り返る。

「確か…転校生の霧沢か。」

「否定しないってことは肯定ってことだよな。お前さ、腕一本折ったくらいで死ぬの？馬鹿げてると思わない？」

山本の顔が険しくなる。お、地雷踏んだか？

「霧沢に何がわかるんだよ。オレは野球命だった。腕を失ったら何も残らねーんだよ。」

ナニソレ。笑わせんな。

「あはははは！甘ったれんじゃねーよ。」
秀囲気の変わった蒼に少し驚いた顔の山本。

「腕を失ったら何も残らねえって？誰でもケガはするんだよ！そしてケガはいつか癒える。ケガ一つで死なれちゃみんな死んじまって神サマも困ることだろうよ。とにかく！ケガをしても野球のためにすべきことはあるんじゃないか？」

顔を叩かれたような顔になる。それでもやはりまだ迷いがあるようでうつむいている。大勢の人たちが階段を上ってくる音がする。オレが言えるのはここまでか。

「オレが言いたいのはそれだけだ。よく考えるこつた」
そう言い蒼はまた屋上のドアの上に寝そべった。雲雀サンがよく寝てるとい。

するとドアが開きたくさんの人がなだれ込んでくる。沢田や浅野望もいるようだ。浅野がどう動くか見物だな。沢田と浅野が山本の前

に出る。

「武君！こんなことしない方がいいよ！」
えー。一言めがそれ？ナンセンス。

「二人とも止めにきたならムダだぜ。ツナ、お前ならわかるだろ？
何もかもうまくいかないなら死んだ方がマシだってよ」
山本が二人に言う。

「え、い、いや、山本とオレは違うから…」
沢田が言う。

沢田…それは誤解される。

「さすがだな。オレとは違って優等生ってわけだ」

あーあ。やっぱり。

「えー！ち、ちっ、違うんだ！ダメな奴だからだよ！」

「!?!?」

山本が驚いた顔をする。

「オレ、山本みたいにちゃんと努力したことないんだ。むしろ死ぬ
ときになって後悔するような奴なんだ…どーせ死ぬんだったら死ぬ
気でやっつけばよかったって…。だからお前の気持ちはわからない
！ごめん！」

そう言いさわだがドアに向かって走り出す。それを山本が慌てて襟
を掴んで止める。

結果。沢田がバランスを崩し、山本に激突。

二人で落下

「今こそ死ぬ気になる時だぞ」
ズガンッ

リボーンが死ぬ気弾を撃つ。

「空中リ・ボーン!!!死ぬ気で山本を助ける!!」

ポヨヨーン

沢田のつむじのスプリングのおかげで二人は助かった。

「お前の言う通りだ。死ぬ気でやってみなくっちゃな」
「!」

沢田が驚いたような嬉しいような顔をする。

「あと霧沢にもお礼だな!ツナたちがくる前に来てアドバイスくれ
たんだ!」

「霧沢さんが!?!」

あいつアホか。あれは言いたいこと言ったただけだっつーの。そーいや浅野は結局なにもしなかったな。ま、いつか。帰ろ。帝は何処だ！。

「帝！。オレ人の命救ったかも！。」

「は！？」

第4雨

オレ、人の命救ったかも…（後書き）

うーん。リボーンの出番が少ない？次はオリジナル寄りになりそうです！うし！がんばります！　てゆーか原作ばかり…；；；

第5雨

オレ、初の女友達ができた！

おはよーございます。寝起きの霧沢蒼です。現在9時。

え？遅刻なんじゃないかって？

今日は土日なのだー！

てなわけで。帝クンに買い物につきあってもらいまーす。起こしに
いっつど。

コンコン。

「みーかーどくん、あっそびーましよー!」

「…………え?」

?? 商店街??

「オレ…いつもだったらまだ寝てる時間なのにー!」
帝の悲痛な叫びが響く。

「そんなこと言ってねーでホラ、荷物を持つ！」
帝は荷物を持たされていた。女性の買い物は大変だ。

クツソー、眠ー。重いー。蒼の奴起こしたのはこのためかよ！

「次はあそこー！」

あの無邪気さがかわいいけど恨めしい…。

あ！ていうか…

「ち、ちよ、ちよつと待て！蒼！もう金がねーぞ！？」

蒼が振り返り、ニコツと笑ってツカツカ戻ってくる。その笑い怖いんですけどー（泣）

「え？」

オレ真っ青。蒼は笑ったまま肩を組んでくる。

「帝クーン。確か前神サマだって言ってたよねえ？今こそその力を使う時だと思わない？」

「…金を…作り出せと……」

「うん？」

あー、変な汗だらだら出てきた。てゆうかハート黒いんですけど。

「それって犯罪じゃ…」

「うるせー黙れ？」

「すみませんでした。」

良い子はマネしちゃダメだよ

「あー買った買ったー」

「重い…」

二人は帰り道を歩いてきた。ふと蒼が後ろを振り返り、首を傾げる。

「蒼、どうかしたのか？」

「…。いや、なんでもない。いや、なんでもなくない！ちょっと公園寄って帰るから先帰ってて！」

「じゃあオレも…」

「大丈夫！」

蒼が走っていく。ポツンと残された帝は？？

「いや、オレが寂しいんだって。…帰る。」

??歩き出す。

寂しがりな帝クンだった。

一方公園に着いた蒼。

ギシッ

ブランコに座り、言う。

「そろそろ出てきたらどうかな。オレしかないよ？」
ガサガサッ

木の陰から人が出てくる。やっぱりつけられてたか。

あれは凧…いや、もうクローム髑髏か。

「あ…ごめんなさい…」

「謝らなくていいんだけどさ。帝と買い物してたときからいたよな？オレに何か用？」

クロームが戸惑うように一歩下がる。

「あの…そのチョコレート。かつこいいなって…何処で売ってるの
かって…」

「え…それだけ？」

あ、今のオレたぶんスゴいマヌケな顔してる。

「うん。」

「なんだ。早く言えよ。買いにいこーぜ。」

蒼が立ち上がりながら言う。クロームが驚いた顔をする。

「いいの？」

「もちろん。ついでにその制服の代わりも買ってやるよ。コーデ
ネットしてやる。」

「え…。さすがにそんなにしてもらえない。」

「いーっていーって。記念！…友達記念？」

クロームの顔が明るくなっていく。

「友達？」

「おう！友達だ！」

「…うん！」

このときがオレにとってもクロームにとっても初めての女友達だっ
た…

第5雨

オレ、初の女友達が出来た！（後書き）

いつも短くてすいません！時間がなくて…でも投稿したくてです
ね…。結果短いものになっちゃってね…。うーん。次はいろいろキヤ
ラ出てきますよ！

第6雨 クロームと店へ

そうしてまた商店街に来た蒼とクローム

「んー確かこの辺の店だったと思うんだけどなー…おっ、あった」

そう言いクロームを引き連れ店の中に入る。
チリンチリン…

「いらっしやいませー。あ！蒼ちゃんまた来てくれたのー!？」

レジに立っていた店員が蒼たちを見るなり嬉しそうに声をあげる。
この人はマキさん。この店の店長をしている。この店によく来店する蒼と趣味が合い、仲良くなった。

「ああ！ねえマキさん、オレのこのチョコカーって在庫ない？」
蒼が左手首のチョコカーを見せて言う。

「あー！そのチョコカー！蒼ちゃんが初めてこの店に来てくれた時のね！あるわよ。何、彼氏とペアルック？」

「ちげーよ！いねーし！この子、クロームってんだけどさこれと同じのが欲しいんだって」

マキの目が蒼の後ろに半分かくれていたクロームの方に向く。ビクツと震え、蒼の後ろにさらに隠れる。クロームはあまり人に慣れていないらしい。でも多分マキさんになら心を開けるんじゃないかなー。オレも信頼してるし。

「まあ、かわいい子じゃない。よろしくね。」

そう言いマキがてを差し出す。クロームもおおずとおおずと手を差し出す。握手をし、マキがニコツと笑い、店の奥に向かう。

「ちよーどラストだったのよー。はいっ。これで良かったかしら？」
クロームにチョーカーを渡す。クロームの顔がみるみる明るくなっていき、コクコク頷く。

「そーだ、マキさん。クロームに似合う服選んであげてくれない？」

「え？」

マキが不思議そうな顔をする。

「クロームさ、この制服以外ないんだって。オレがコーディネートしてあげようと思ったんだけど…オレセンス悪いからさ。」

「そんなことない！…蒼はセンスいいよ！」

クロームが食いつく。なんでそこでくいつくんだろ？

「ありがと？」

「…うづん…」

嬉しそうにうつむく。マキが口を開く。

「あたしもクロームちゃんに同感だけど…まあそういうことなら任せて！料理しがいがあるわねー。五分ほど待ってて！全身コーデでいいわよね？」

「ああ。よろしく。」

マキがまた奥に入っていく。

「どつよー！」

マキが自信満々に言った。

白い生地に髑髏が描かれているタンクトップに黒の半袖ジーパン。結構フリルのあるベルト付きのミニスカに七部丈レギンス。それと赤いパンプスだ。

「いい！クローム似合ってるよ！」

「ありがとう…」

嬉しそうにお礼を言うクローム。

「じゃあ会計ね！」

マキが言う。

「え？」

「…え？」

「いや、そこは常連客のよしみでさあ…」

「こっちも営業なんだよね…！わかったよ！半額！1530円
でどうぞ！？」

「オツケー、さすがマキさん！」

無理矢理値下げし、店を出る。すると…

「え！？霧沢さん！！」

「これはこれは…沢田軍団。」

第6雨 クロームと店へ(後書き)

あーーーーー!!!なんか大ジヨブかな…

次はツナたちが出てくるヨ ウザ…

第7雨

オレ、ケンカします

なんなんだろ。オレ今日運がいいんだか悪いんだかわかんねー。

何で今……

沢田たちと会わなきゃいけねーんだよ！

なんでこんなとこに霧沢さんがいるんだ!?

今日は京子ちゃんと出かけられると思ったたらリボーンと獄寺君と山本、ランボにイーピンたちまでついてくることになって気分が下がってるんだよなー。というか霧沢さん怖いよ!

リボーンは気になるみたいでずっと調べてまわってる。雲雀さんに勝ったって本当かな?

わわわわ、何かこつち睨んでるー!

「何でアンタたちがここにいるんだよ。」
蒼の発言に獄寺が食いつく。

「十代目になんて口利きやがる!」
そう言いダイナマイトを構える。

「まだ懲りてないの? 負け犬君? それにオレは沢田に聞いているの。」
あわてて答える。

「い、いや、ちょっとみんなで購入物に来たんだ。」

「それにしても引き連れ過ぎだろ。あ。この子かわいい」
イーピンの前でしゃがみ、話しかける。

「君、チャーハン作れる?」

えー!?!?いきなりの質問がそれ!?

イーピンが頷く。

「そっか。今度食わせてくんない? 中華料理好きなんだ」

イーピンが嬉しそうにまた頷く。

霧沢さんって……ほんとに優しいのかもな……

「お。そーだ。クローム帰ろうぜ……っていない!？」

ほんとだ!霧沢さんの後ろにいた子がいなくなってる!?!何処行っただ?

「いや!やめて!」

霧沢さんの後ろの方から声がする。さっき霧沢さんの後ろにいた子が三人のヤンキーに囲まれてる。関わりたくないー!

カチャッ

「ツナ、行ってこい」

リボーンが銃口を向けてくる。

「ちょ、ちょっと待って！タンマ！」
でもその銃口が引かれることはなかった。

「余計なことをするな。アルコバレーノ。」
リボーンの首にクナイが当てられる。リボーンが反応できなかった
！？そんなことって…

蒼はリボーンの首からクナイを離すとクナイをしまい、クロームの
方へ走っていき、ヤンキーの手を掴む。

「オレの連れだ。離せよ」
「ヒュー！こっちの姉ちゃんもきれいじゃん！遊びのお誘いしてた
だけだぜ？」

ヤンキーがへらへらと答える。蒼が眉をしかめたことも知らないで。

「もう一回忠告する。5秒以内に手を離せ」
「だからお誘いしてるだけだっていつてるじゃん！遊ぼー…

「宣告終了」

ゴスッ

蒼がヤンキーの腹に思いつき蹴りを入れる。

「がっ…」

ヤンキーが吹っ飛ぶ。

「テメー何すんだよ！」

「調子のつてんじゃねーぞ！」

他の二人もかかってくる。

「哀れだな。かかってこなければ何もしなかったのに…」

その後10秒でケリがついた。蒼の圧勝だ。

「クロ？ム、大丈夫？」

「うん！ありがとう」

「帰ろうか。送るよ」

何もなかったかのように二人が歩いていく。

チリンチリーン

さつき二人が出てきた店から女性店員がでてきた。

「あー！また蒼ちゃんケンカしたのー！？まったくもー、処分する方も大変なんだからー。」

そう言いヤンキーたちたちを引きずって連れて行く。

何処に連れてくの！？ていうか処分するってヤンキーたちどうなっ
ちやうのー！？

その場にいた人たちの思いが一つになった瞬間だった…

スゴい…霧沢さんってこんなに強かったの？さっきもリボーンに気づかれてなかったし…

なにもの………!?

霧沢蒼：やっぱりただ者じゃねーな。さっきのケンカの強さ半端じゃねーぞ。しかも奴は武器を使わないであの強さだ。その前の…。まったく避けられなかった…。心配すら感じなかったぞ。さらに気になるのは奴の情報についてだ。ボンゴレの情報網を使っても何も出てこねえ。あいつのいとこの神野帝もだ。どうなってんだ？絶対暴いてやるぞ。

「ファミリーにも入れるしな」

「今度は誰ー！？」

「ヒミツだ」

ツナの悲痛な叫びが響く中リボンがニコツと笑った。

「ハックション！！ズズツ。なんなんだよ最近風邪気味か！？」
「蒼：大丈夫？」

「ああ……平気。」

第7雨 オレ、ケンカします（後書き）

こんにちはー！更新遅くてごめんなさい！

神野帝って…そのまんまジャン…

自分で神だって言っちゃってますよね…

第8雨

オレら、二人そろって遅刻中！

あーよく寝たー！おはようございますー！

霧沢蒼でございますー！昨日はいろいろあつたとはいえクロームをちゃんと家に届け、めでたしめでたしでしたねー！というかめでたしでっただんですよー！なんでこんな口調かって！？そりゃあなた……

走ってるからっすよー！

帝クンと仲良く遅刻中！

さかのぼること二十分前……

「…お。ああ！蒼！起きろってのこの！」

バサッ

布団をはがされる。

「んだよ。今日は日曜日だろ…」

蒼が寝返りをうちながら言う。

「昨・日・が・日曜だ！今日は月曜だ！ちなみに8時10分！」

蒼、一時停止。

チツチツチツチツチツ…チーン！

「はー！ー！？もう授業始まんじゃねーかもっと早く起こせバカ！」

「オレは7時半からドアの向こうから叫んでたけどな！寝てる女の部屋に入ったオレの勇気をたたえて欲しいくらいだ！このねぼすけ！」

「ねぼすけはやだ！何か響きがマヌケ！」

「知るかー！」

そんなやり取りをしながら制服を最低限着、髪を結び、食パンくわえて家を出る。

「おい帝！神サマなんだろ時間止めらんねーの!?!」

「やろうと思えばできるけど禁止なんだよ!」

「やれんならやれよ!」

「…オレの言ったこと聞いてたか!?!」

門が見えてくる。ん？なんか門高くなってねえ!?!雲雀が立っている。

「飛び越えられないように高くしたのさ。風紀を乱すものは……噛み殺す」

そーいうことー。納得。でも…

「なめんなよ!」

思いっきり地面を蹴り、門に乗る。

「お、帝、また窓開いてる」

「開けといたんだよ、バーカ」

「おー！感謝！んじゃヒバリさんバイバイ」

帝が門を蹴り、窓に乗る。続いて蒼も門を蹴る。

「ふー。良かった。無事着地」

帝が窓枠にのり、安堵のため息をつく。

「どけ帝ー！ー！」

ドゴッ

「ぼへぶっ」

蒼が帝の背中を蹴り飛ばし、帝は教室の方へ落ちる。

スタッ

「ふー。無事着地」

その言葉に帝が文句を言う。

「待て！オレが無事じゃない！」

「知るか」

「知るかって！知るかはねーだろ。てゆーか蹴ることねーだろ」

「どけて言ったじゃん」

「あれで退くことができたならスゴいよそいつ！」

ギヤーギヤー言い合ってる二人をボーゼンと見ているクラスの人＋先生。

先生が我にかえり、

「二人とも、その服装は何？整えなさい！」

確かに蒼たちはシャツのボタンはズレ、ネクタイはユルユル。髪はぼさぼさ。ひどい有様。

でもね…

今つっこむとこそじゃないでしょー！！

クラス全員の思うことが一致した。

今日は確か笹川了平が沢田と戦う日だな。

熱血ヤローは嫌いなんだよなー。ウザイうるさいめんどくさい。嫌いな三要素が全部入ってる。でも見に行かなきゃなー。

浅野は動くかな？まさか傍観してるだけなんてないよな？まあすることなんてないけど。

救急セット持ってきたら爆笑だな。

そんなことを思いながら椅子に座った蒼だった。

第9雨

オレ、言い争いをする？

放課後…

さーて…ボクシング部に行くか。

「ゆくぞ！沢田ツナ！手加減などせんからな！！」

おーやってるやってる。ギャラリー多いな…げ、浅野もいる。

ぶっ！ 吹き出す

ホントに救急セット持ってきてる…どんだけ…

カーン！

スタートの鐘が鳴る。

ゴッ

ドダーン！

いきなりツナが殴られ、倒れる。

「油断するな沢田！」

「（違うよ実力だよー）」

沢田…… 本当に哀れだな……

チャッ

リボーンが銃を構える。

「（ひえー！今死ぬ気弾撃たれたら、京子ちゃんのお兄さんをボコボコにして京子ちゃんに嫌われちゃうよー！）」

撃っちゃダメー！という風にジェスチャーでリボーンに伝える沢田。

それで伝わったらすごいよ……お前もリボーンも。

「なら、こつだ。」

ズガンッ

リボーンが了平を撃つ。

えー…今のジェスチャー伝わったの？…

だが、撃たれても了平にはなんの変化もなかった。

「まさか…普段から死ぬ気の方は死ぬ気弾撃っても変わらないの！？」

「笹川了平。たいした奴だな」

はい、リボーンのお気に入り決定。

その後、沢田にも死ぬ気弾が撃たれ、結局笹川兄をボコ殴って終わり。

でも…

「ますます気に入ったぞ沢田！お前のボクシングセンスはプラチナムだ！！必ず迎えに行くからな！」

「もーお兄ちゃん嬉しそうな顔してー！」

「（むしろ気に入られたー！？？）」

沢田の心配はすべてムダだった…

「お前ファミリーに入らねーか」

「逆スカウトすんなよ！」

リボンが了平をスカウトしだし、急いで止める沢田。

あーあ。ホントなんなの。ホントに見てるだけじゃん。浅野。笑って眺めてんじゃねーよ。ピンピンしてるけどケガ人が目の前にいるだろっがー！

イライラしてじっとしていらなくなった蒼は窓を開け、中に入る。

「え！？霧沢さん！？」

沢田が驚いた声を出す。獄寺達も驚いてるようだ。蒼は浅野の方に歩いていき、救急セットをひったくる。

「貸せ！」

「あっ」

そして了平の方へ歩いていき、テキパキと消毒など、簡単な対処をする。

「ん。終わり。んじゃ、やろうぜ」

そう言って蒼がグローブをはめる。

「「「「「え?」「」「」

その場の全員がきょとんとした声を出す。

「おう、もしや入部希望だな!？」
了平が蒼の方を向いて言う。

「ちげーよ」
蒼があきれながら答える。

「オレともボクシング。やるうぜ。」
蒼がニヤツと笑って言う。

「ほづ。いいぞ」
了平もニヤツと笑って答える。

「（えー！ー！ー！なんでこの人さっきお兄さんの応急処置したの
ー！！？）」
心の中で密かにツッコミを入れるツナだった。

「えっ、でも霧沢さんは女の子だし、やめた方がいいんじゃないかな
いかな？」

？浅野望だ。オレはなんでかこの女がものすんごい嫌いだ。

「ハッ。女の子だし？女は弱いと決めつけないでほしいね。女だつて強くなれる。努力もしねーやつに止められたくねーよ」

浅野が衝撃を受けた顔になる。でもキツと蒼を睨み、

「！…心配してあげただけなのに…」

「あげた？既になら目線なんだな。心配してくれたみたいでどもありがとーございました。あーあ。時間のムダ。始めよーぜ。」
蒼が了平の方を向く。

「おう！」

了平がグローブをパアンとならす。

「ツナ。」

リボーンがチヨイチヨイとツナを呼び寄せる。

「何？」

「よく見とくんだぞ。ファミリーに入るんだからな」

「えー！？昨日言ってたのって霧沢さんのことだったのー！？」

うるさそうに蒼がツナの方を見る

「オレが何だ？沢田」

「い、いや、なんでもないよ！」

蒼がまた了平の方を向く。

「んじゃ、今度こそ…」

「楽しい時間の始まりだ」

第9雨

オレ、言い争いをする？（後書き）

うん！今度はそこそこの長さかな？

…ていうか浅野…作者に嫌われたか？かわいそうになってきた…

次回は了平と蒼が対決しちやいます！果たして勝つのはどっちでしょうか！？

蒼：オレに決まってんだろ。

また来たの！？

蒼：来ちやわりーかよ。

いえいえ滅相もございません…

蒼：ていうかさ、オレ時々めっちゃ出番少ないじゃん？だから代わりにこの後書きに出てきてるってわけ。

い、いや、私はここでしか喋れないんですけどおー！！！！

乗っ取らないでおくんなましー！！

それじゃまた次の話で！！

第10兩

オレ、笹川兄と戦う！

やっと始まる。

カーン！

開始の鐘が鳴る。

ビュッ

いきなり了平が仕掛けてくる。

「！ヒュー、やるね。さすがボクシング部。」
そう言い蒼が簡単に避ける。

その後も了平が左アッパー、右フック、ボディブローと連続で打ってくる。

だがその全部を蒼は避けきってしまった。

「うし。オレもそろそろいくかな」

ドゴッ

蒼がボディブローをいれる。すごい勢いで了平が吹っ飛ぶ。

パリーン

あーあー窓ガラス割れたよ。ボクシング部の窓だいじょぶか？

「えー！？お兄さんが負けた！？」

沢田が驚いた声を出す。

アンタも倒しただろうがよ。

ため息をつきながら了平の方へ向かい、手を差し出す。

「ん。」

だが了平がいきなり起き上がる。思わず蒼が退く。

そして蒼の肩をガシッと掴む。

「霧沢蒼といったな。是非ボクシング部に入らんか!？」

「は!？」

「お前のボクシングセンスはビッグバンだ!」

いや最早何言ってるのかわかんねえよ!!

「丁重にお断りさせて頂く」

「極限になぜだ!」

あんたみたいなのがいるからだよ…

「まあ楽しかったよ。じゃあな」

その言い部屋を出る。

「なんか…嵐が去ったというか…」
沢田がぼーっとして言う。

「霧沢蒼。やっぱりファミリーにいれねーとな」
「まだ言ってるー!!」

リボンと沢田のコントのようなやり取りは続く…

並盛商店街を歩く蒼。

「んー楽しかった！。でも何か腹減ったな…」

商店街を歩いていくと寿司屋が見えてきた。

「寿司屋か。今日は久々に奮発するかな。」
「そうつぶやき、のれんをくぐる。」

「いらつしゃい！お一人様で？」
「はちまきを巻いた髪のツンツンしてるおじさんが元気よく話しかけてくる。」

「ああ。まずは茶碗蒸しとマグロお願いできる？」

「へい！少々お待ちを！」

ふーん。チェーン店とかじゃないみたいだけど…味はどうだろ。

二、三分後…

「へいお待ち！」

そう言い、出してくれる。

「ども」

まずは茶碗蒸しを口に運ぶ。

「！うまい。」

「お。気に入ってもらえたかい。うちの寿司は絶品だからな！」
おじさんが嬉しそうに言う。

「でも…マグロは…少し温まってる…」

「そうかい。そりゃすまなかつたね、つくり直しましょっかい？」

「いや、いい。それより」

さばかせてくれ」

「え？」

おじさんが驚いた顔をする。そりゃまあ魚をさばかせるとかいう中学生はいないわな。

「オレこれでも実は25歳なんだ（大嘘）。一回さばいたことあるんだ（本当）」

「そうなのかい！でもその制服：俺の息子と同じなんだが…」
あ。制服なの忘れてた。んー。どうしよ。

「あー。んー。あ！これはバツゲームみてーな！そんな感じだ！多分！」

「？まあいいよ。」

目の前にでっかいマグロが横たわっていて、包丁を渡される。

フー

目を閉じて息を吐き出す。

カツと目を見開く。

ズバズバツ

ストトトツ

一瞬でマグロをさばき、用意されていた皿にのせた。

「あちゃー。少し太さが違うか。失敗した」

「…すげーな。嬢ちゃんにもんだ？お前剣でも習ってたのか？」
おじさんは開いた口が塞がらないというかんじだ。

「いんや。」

「すげーな。話聞かせてくんねえか。酒でもおごるぞ」

あ…オレ25歳で通ってるんだっけ。

その後おじさんと一緒に酒を飲み、蒼はめっちゃ酒に強いことがわかりましたとさ。

ガラッ

「ただいまー親父！つて霧宮！？何してるんだ！？」

山本！？ああ…山本ん家つて寿司屋だったっけ。

そら驚くわな。クラスメイトが自分ちで足組んで自分の親父と酒飲
んでんだから。

「おい親父！何飲ませてんだよ！未成年だぞ！？」

「ん！？その嬢ちゃん25つて……」

「オレのクラスメイトだ！」

おじさんは青ざめたり驚きで赤くなったり大忙し。

でも……こんな親父さんがいるんだったら

山本のことは信用してもいいのかもな……

そう思いながら蒼は意識を手放した。

「霧沢！おい！…寝ちまったじゃねーか！親父が飲ますから！」

「だ、だってよう…いい包丁さばきだったからちつと語り合いたくなっちまって…」

「まあしょうがないな。寝かしてくる。」

そう言い蒼を抱え居間に向かう山本だった。

第10兩

オレ、笹川兄と戦う！

(後書き)

蒼：おい！霧宮（作者）！何未成年に酒飲ませるんだ！

いいじゃん。蒼が酒に強いことわかったし。いい子はマネしちゃだめですよ

ドゴッ

イタツ痛いよ蒼さん！

蒼：うざかった。

…それだけ。それだけで？まあいいや。次回、恋愛ものは期待しないでください！

さぶぽです！

第11雨

オレ、初の男友達！

…ん。何処だここ。めっちゃフツの部屋。うっ。何これめっちゃ気分悪いんだけど。

あー。そういえば山本の親父と酒飲んだんだっけ。てことは山本の家か。

ガチャ

「おお、霧沢！起きたんだな水と薬持ってきたぜ」
そう言い蒼の寝ている布団の近くのテーブルにおく。

「…サンキュ」
起き上がり、水と薬を飲む。…苦っ。

「なあ、お前なんで25歳なんて嘘ついたんだ？」
親父さんから全部聞いたらしい。苦笑しながら聞いてくる。

「？。…中学生がマグロさばけるとか言ったら引かれると思ったんだよ」
そっばを向いてバツが悪そうに答える。

つかの間の沈黙。

「ぷっ、あはははは！お前面白いのなっ」
山本が腹を抱えて笑い出す。

「なっ、そんな笑うことないだろ！」
それでも山本の笑いは止まらない。

「わ、悪い、でもよ、霧沢って楽しい奴なのな！もっとムスツとしてる奴かと思っただぜ」

どっかの風紀委員長と一緒にするなよ。

「親父も気にいっててさ、また来いつて。今度は酒なしで」
いやまあ普通酒なしだけどな。変な会話をしていることが笑えてくる。

「なあ、霧沢のメアド教えてくんねーか？親父の伝言とかもあるしな」

「かまわねーよ」

ケータイを出し、プロフィールを送る。

「ハハハハッ！お前メアドまで面白いのな！」

「んなことねーよ！フツーだ！」

赤面し、そっぽ向く蒼。

k o k o m o n e . . . i a m a o . . . i w a s R E B O R N ! @

「もう遅いし送るぜ」
「どーも。そーいや」お前「は何かヤだな。蒼でいーよ。」
「そっか！オレも武でいいぜ！」
「ん。」

そう言い家を出る二人だった。

蒼と山本が並んで歩いてる様子を見ている者がいた。

浅野望だ。

「なんで霧沢さんと武君が一緒にいるの……？私とはいろいろ理由をつけて話してくれさえもしないのに……。ううん。偶然会っただけだよね。明日は私とも話してくれるよね？」

「蒼のメアドって変なのな！」

「だからどこがだよ」

「だってよ、『私は蒼。私はレボルンでした』っておかしくないか？蒼の昔のあだ名か？」

「……あのな。REBORNはレボルンじゃなくてリボンって読むんだ！REの部分は、また、再びって感じの意味がある。BOR Nは生まれるとかそんな感じ。つまりREBORNは生き返るってこと。わかったか！？」

「なんとなくわかったと思うぜ！ハハハッ」

「英語はなんとなくじゃだめなんだ！」

「蒼だって『そんな感じ』とか言ってたのな」

「っ！そ、それはそれだ！」

蒼の英語講座は蒼のマンションまで続いた。

「ただいまー」

家に着いたのは11時半だった。帝はもう寝ている。机の上には一人分の夕食があった。

「…量多すぎだったの。」

少しあったかい気持ちでベッドに入った蒼だった。

第11兩

オレ、初の男友達！（後書き）

短いのは気にしないーい！キャラ崩壊も気にしないーい！

蒼：気にしろ。

敵しいッ

リボーン：当たり前だぞ。

アンタまで出てくるのー！？

リボーン：もっと出しゃがねー！

スンマセン…：さよなら…：次の話で会いましょう！

第12雨

あー…よく寝た…

キーンコーンカーンコーン

ふあゝ…んーよく寝た！もう昼休みか…

朝のホームルームから記憶がないのはなんでだ…？

「蒼が寝てたからだよ！」

「っ!?!？」

ガタタツ

いきなり声が聞こえたので音を立てて椅子ごとさがる。

「なんだ…帝か…脅かすなよ」

帝は蒼の机に手をつけてしゃがんで、顔だけ出ている状態だ。

「別にオレだって驚かそうとしたわけじゃないって。お前な、ずっと寝てると写真撮られ放題だぞ？」

「は？オレの写真撮って何も得することなんかねーだろ。」
帝は呆れ顔で、

「あのな、お前は結構人気あるの。おわかり？知らない人が自分の写真持つてるって気持ち悪くないのか？」

「ますます意味わかんねー。まずオレ人気ねーし。なんか女子とかと目が合つと赤くなって目そらされるし。何怒ってるんだか。」

「どーでもいーよ。オレ飯食ってくる。」

最近は天気がいい日が続くので屋上で食べている。あそこの風が丁度いいから好きだ。

「おいちよつと待っ

「帝ー飯食おうぜー」

クラスメイトが呼んでる。

あーもー…後で言えばいつか。

「おつ。今いく」

帝も行ったし屋上屋上

席を立ちドアの方へ向かう。

「武くんっ!!」

ん？前は全然気にしなかったけど武は少し仲良くなったしな。声をかけたのは…

浅野か。

「一緒にご飯食べよ?」
うわ。オレだったらぜったいやだ。でも武だったら断らないだろうな。

「わ、悪い、今日はちよつと...」
あれ?

バツが悪そうに武がふいに後ろを振り向く。そこには丁度屋上へ行くこうとドアに手をかける蒼がいた。

「っ！オレ今日は蒼と飯食う約束してたんだ！わりいな、また今度...」

「は？オレは別に...」

「ホラ屋上行こうぜ！」

そう言い武が蒼の背中を押し、教室を出て行く。

「『また今度』って…いつ？」

一人残された望が言った一言は誰にも聞こえる事はなかった。

「あ、あのさ、望ちゃん。よかったら一緒に食べない？」

ツナが望に声をかける。

「いいの？」

「もちろん！いいよね、獄寺君？ってあれ…？」

ツナが振り返ったそこには獄寺はいなかった。

「…おい。どういうことだ？お前浅野の事嫌いじゃねーんだろ？」
屋上へ向かう階段を上りながら武に聞く。

「ああ。嫌いじゃないぜ？でもよ、浅野の隣の席の奴いるだろ？あいつが浅野の事好きらしくて協力してくれって頼まれちまって…」
あー。そういうこと。納得。武らしいかも。…でも浅野もかわいそうだこと。それにしても…

「いつまで隠れてるんだ？」

「獄寺くん？」

「チツ、気づいてやがったのかよ。」
「そりゃ、あんだだけ殺気プンプンさせてたら…ねえ？」

「ご、獄寺！こんなところで何やってるんだ？」
「野球馬鹿には関係ねえ！」

あらら。素直に聞けばいいのに。
「はー。なんで昨日までツンツンしてたオレが武と仲良くなったか…それが知りたいんだろ？」
「っー！」

「凶星ー」
そんな事話してるうちに屋上につく。
「まあ一緒に食つか？教えてやるよ。理由。たいした事じゃないけど。」
「そう言いドアを開け、床に座る。」

「武とは、あれだ…」
獄寺がつばを飲む。

「なんだかんだで仲良くなった」
ガクッ

「はははっ、たしかにそんな感じなのな！」

武の親父さんと酒飲んで仲良くなったなんて言えねーだろ…。

「そういえば獄寺はツナと食べなくていいのか？」
山本が獄寺に聞く。
確かに。いつも沢田にくつついてるのにな。

「今日はいいんだよ！浅野がいるしな」

「お前浅野嫌いなのか？」

蒼が聞く。その問いに獄寺が頷く。

「あの女十代目のお傍をチヨロチヨロしやがって…」

あー…何、こいつも何か誤解してんの？

第12兩

あー…よく寝た…(後書き)

ちょっと長くなりそうなのできります！

更新遅くなってごめんなさい！

第13兩

オレ、みたらし食いまくる!!

??前回の昼休みの続き??

獄寺!。誤解してますよ!。浅野が沢田に近づいてるんじゃないよ!。浅野が武の事好きなのに気づいた沢田が気遣ってやってんだと思っよう?でも…

「オレも浅野は苦手だな。あいつは助けてもらっばかりのタイプだ」
蒼がみたらし団子を食いながら言う。

「ハハハッ!でもでも優しいところもあるんだぜ!」

山本がさりげなく?フォローする。まあ優しいかもしんねーけど。
「それでもオレは守ってもらっばかりの奴は嫌いだ。優しい奴は大体臆病者だしな」

食べ終わった団子のくしを山本の方へ向け、言う。それまで黙ってた獄寺が口を開く。

「なあ、話変わんだけどよ、お前昼ご飯にみたらしなんて食ってのよ!？」

そう言い蒼の弁当箱の中の大量のみたらし団子に目を向ける。確かに言われてみると昼ご飯にみたらし団子だけとはとてもおかしく、しかも量が半端じゃない。

「た、確かにすごい量なのな…」

山本も驚いた顔でまじまじと見る。

「ん？そんなにおかしくねーだろ。一本食つか？」

蒼が獄寺にみたらし団子を一本差し出す。

「いや、オレはあんこはだからいらねーよ」

「（断る理由それかよ!）」

密かにつつこんだ山本だった…。

プチ。

「ん？おい野球馬鹿。お前なんか糸切ったか？」
「いや、切ってないぜ？獄寺が何か切ったんじゃねーのか？」

「おいてめえ……」

二人が振り返ると蒼がスゴい量の殺気を放っていた。

「団子は当然、みたらしだろーがあー！ー！！！」

「……は？」

蒼が突然みたらしについてキレだしたのだ。

「は？じゃねーよ、てめーなあ、みたらしは団子の王様なんだよ」

K I N G O F 団子”なんだよ！”

その後もあんこはパンと共にあるべきだとか、みたらしは甘味の中

でもトップだとか訳の分からない事をいい連ねる蒼。これはエンドレスだと察した二人。

「お、おれもみたらし好きなのな！うまいよな！一本くれねーか？」
「ん」

蒼はまたみたらし団子をくわえ、もう片方の手で山本に団子を渡す。なんとか怒りは収まったようだ。

「（野球馬鹿、ナイス！）」
心底ホツとした獄寺だった。

「（それにしてもスゴい量だな……）」

「そういえば獄寺は蒼の事名前で呼ばないのな」

「それは今少し話したただけだしよ……」

「オレは別にかまわねーぜ。『浅野がちょっと、いや正直かなりウザく感じる同盟』結んだしな！」

「いや組んでねーし！つか長ーんだよ！」
獄寺がつっこむ。

「『浅野うざい同盟』」

「…略し過ぎじゃね？直接的すぎね？」

「まあ細かい事は気にするな！オレはなんて呼べばいい？」
獄寺が一瞬ポケツとして我にかえる。

「何でもかまわねえ」

蒼のシンキングタイム しばらく腕を組んで考えてたが、何か思
いついたみたいで顔を上げる。

「獄寺って59って感じで中途半端だから60にして六十寺とかど
うだ!？」

チーーーーーん…

「蒼…人の名字を中途半端はひでーのな…」

「そ、そうか。じゃあやっぱノーマルで隼人でいーよな！」

「もう何でもいいぜ…。」

キーンコーンカーンコーン

「お、予鈴だな」

「帰るか」

そうして教室へ戻っていった。

????廊下にて?????

「なあ蒼、テメーさっきの弁当にみたらし団子何本入ってたんだ？
ふと思い出したように獄寺が蒼に問う。」

「ああ。50本。」

「「50本!？」」

「あー…幸せだった…」

嬉しそうな顔をする蒼。

「てことは50×4…団子200個じゃねーか!」

「ありえないのな…」

「んなことねーよ。もっといけるぜ?」

そう言いニカッと笑う蒼。

「（食った分は腹の何処に消えたんだ??）」
二人に新たな疑問が浮かんだ…

第13兩

オレ、みたらし食いまくる！！（後書き）

さて、蒼のイリユージョン！団子は何処に消えたんでしょうかねー
ー！食ったもんが消えるなんて最高じゃないですか！！

世の中からメタボが消えますよ！

皆さんは団子はみたらし派ですか、あんど派ですか？私は…
みたらし派です！

蒼：誰も聞いてねえよ。

またあなたですか！いーもん！きつと誰かは答えてくれるもん！…
暇がお有りの方はコメントくれたら幸いです…

！そーだ！もうすぐ二作目を始めようと思います！私の部メンをモ
デルにしたものです！題名は…まだ考えてないです…

始めたらまた報告させていただきます！

蒼：誰も見ねーよ。

またですか！いーもん！でも…載せた時は見てくれたら嬉しいです

…

第14兩

オレ、シャマルと会う！

キーンコーンカーンコーン

放課後か。

…また昼休みの後の記憶がない…

モシカシテ…

これがキオクソウシツ!?

「蒼の場合は寝てただけだ！」

頭の上から声がしたと思ったら何か本みたいなものでも叩かれた。帝が机の前に立っていて、こっちを見下ろしてる。

「いった…ていうか何！？なんで思った事が分かんた！？やっぱあれか！？神サマはエスパーなのか！？」

「は…あのな、全部声に出てたから。誰にでも分かるから。てか人前で神サマとか言うな。」
ため息まじりに言う。

「うーい。」

「…絶対分かってねえ。まあいいや。おまえな、よくあんなにぐっすり寝れるな。」

「お褒めのお言葉ありがとうございます。」
蒼が体を起こし、膝に手をおき座ったまま、きれいにおじぎをする。

「いや。ほめてないから。センサーが教科書で叩いても起きやしない。センサーがかわいそうだったわ」

「んーごめんなさい」

「オレに言われても。」

家に帰る時はやっぱり帝と二人な訳で。

退屈なのよ。わかる？この平凡さ！

つまんねええええ！！！！

とらつわけ。

「帝。レツッ寄り道。」

「は？」

「レツッ寄り道。」

「うん。聞こえてるよ？どした？」

「レツッ」聞こえてるって！どした！？」

あ。

考えてなかった。

「その顔は考えてなかったんだな。」

思いつきり顔に出ていたらしく、帝も呆れ顔。

（もしかしたら帝は蒼という限り常に呆れ顔なのではないか

ばい作者)

「んー。非凡なところ行ってーな」
「非凡か…」

沢田の家は？」

おお！確かにいろんな事が起こってそう！

変な赤ん坊いたし！

漫画の主人公らしいし！

主人公だったらしいとな！

うし。行くところ決定！

沢田宅！！

着いた着いた

蒼と帝は沢田の家の玄関の前にいた。

うんうん　なんか騒がしいぞ

「邪魔しまーす」

「お、おい！普通チャイム鳴らしてからだろ！」

「開いてた方が悪いと思いまーす」

そんな事をいいながら入った先には…

半裸の沢田。

ボクシング本を抱えた笹川妹。

何か変な親父。

あ。赤ん坊もいた。ちっこくて見えなかった。

うん。

「「おじやましました」「

そう言い帰ろうとする二人を沢田があわてて捕まえる。

「わわわわ！ま、待って！違うんだ！これは…」

「うん。わかってるよ、沢田」

「そんな哀れみの目で見ないで〜〜！」

でもまあ面白そうだから見学する事にした。

「ていうか沢田って入れ墨っばいのするの？」

帝が沢田の体の文字をまじまじと見る。

「み、帝君！そんなまじまじと見ないでー！ー！」

沢田はドク口病というのにかかったらしい。かかると人に言えない
ヒミツなどが体に浮き出るらしい。

ぶっ

帝と沢田が言い合っていると、後ろの方から吹き出す音が聞こえた。

蒼だ。

「はははは！お前うるう年知らねーの？」

「な、なんで見えるの！？こんなに離れてるのに！」

確かに沢田と蒼は3メートルくらい離れてた。

「オレ視力いいんだよね。確か2・1はある」

「ええええー！？そんなに！？」

「かわいそうに、集団競技85連敗中つて…100連敗したら祝つてやるよ」

「いらないー！」

そんなところに変なおつちゃんが入ってきた。

「お？こつちの子も綺麗だねー。チューしちゃう？」

「ち、ちよつとシヤマル！」

沢田が慌てて止めようとするがシヤマルとやらはこつちに飛んできた。

まあこれも…正当防衛になるよな？

「最悪過剰防衛くらい受けてやる！」

そう言いつと

バキッ

ドガッ

ドゴーン……

効果音だけじゃわからないっすよね。

蒼の右足がシャマルの首にヒットして、腹をグーで殴り、一本背負いを食らわせ、シャマルを吹き飛ばした次第であります。

「いやー、やっぱりおてんばな子はかわいいな〜」

ピキッ

「ねえ帝……あれはオレに殺せって言ってるんだよね……？」

「いや、気持ちは分かるけど落ち着け？みたらし後で買ってやっから！」

「ホントか！？よし帰ろう、今すぐ帰ろう！」

そっついシャマルの横を通るときボソッとシャマルにつぶやいてから家を出ていった。

その後沢田は無事にシャマルに治療してもらい、ドク口病は治った
とわ。

「ねえシャマル、どうして急に治療してくれる気になったんですか
?」

「ああ、おっきのおてんばちゃんに言われたんだよ、

お前、初めて女の子と話したのが京子ちゃんだったんだな……」

「ほっといて……!!」

ダメっぷりが珍しく役に立った日でした。

「やっぱり団子はみたらし」

「ゴマもつまいのに…」ボソッ

「…なんて？」

「なんでもございません。」

「…ちやうど昔はゴマ派のようですよ。」

第14兩

オレ、シャマルと会う！（後書き）

こんちゃー！なんかツナと少し仲良くなった蒼でしたー。

この前この後書きコーナー読んでくれた方が感想くださいます。

団子の話の時はみたらし派の方がたくさんいらしてうれしかったです（笑）

その時にゴマも3番目くらいに好きと話してくれた方がいて。

帝君に採用しましたあ！

ゴマもうまいっすよねー。

そういえば新しく小説を出しました！『佐藤家の7姉弟の日常』
というやつです！コメディイです。というか霧宮はコメディしか書けません。恋愛系はむずかしいです。でも少し頑張ってみようかなとも思ってたりにして…。にじファンの方から見れるので、よろしければ見てやってください！

なんか後書き長いな…

第15兩

オレ、ドジ野郎と会う!!

「なーなー帝ー。七不思議聞きたい？」

「聞きたくねーけど…聞かれると気になる。」

「あのな……」

「この学校にいと朝からガツポリ記憶がなくなる!!」

「いやお前が寝てるだけだから!それ昨日も言ったから!」

「いや、オレ今日は寝ていないと思う。」

「いや、爆睡だった。ほんと尊敬するくらい。」

「いやいやドローモ」

「いや。ほめてねーし？これも昨日言ったし？」

「いや、オレにとっては最高の褒め言葉だし？」

「お前だいじょぶか？寝過ぎだ。絶対寝過ぎだ。」

「1日の24時間中12時間は寝るためにあるんだ！！」

「ハハハッ、蒼と帝は何コントみたいな事してるんだ？」
山本が蒼と帝に近づいてくる。

「オレはコントをしてたんじゃなくて帝に睡眠について教えてやってたんだ！」

「オレは聞かされてたんだよ」

「端から見たら思いつきりコントなのな。」

山本が笑いながら言う。その後なんだかんだで山本と帰ることになった。

並盛商店街通って帰っていると…

「あっ！」

蒼が少し先の店を指差す。

「ん？何かいい店あったか？」

帝が蒼の指差した先を見る。

「ああ！」

「団子屋!!！」

結局みんなで団子を買ひ、また商店街を歩いていく。

「あ!!」

またまた蒼が何か見つけたようです。

「今度はなんだ？甘味所か？」

そう言いつつ蒼の指した先を見る。

「ちげーよ、マキさんの店！久しぶりだな。入ろうぜ！」
二人の意見も聞かずにスカズカと店内に入っていく蒼。

「付き合っつてやってもいいか？」

「もちろん！全然構わないぜ？」

申し訳なさそうに聞く帝に山本は笑って答える。

「マツキさーん？いるー？」

「ここはマキさんの家か？とツツコミをいれたくなる。

「あら、蒼ちゃん久しぶり！元気そうね！だけど…」

洋服屋は基本食べ物を持ち込まないものよ？」

蒼はまだたくさんのみたらしを持っていた。帝と山本は一本ずつだったのだが、蒼だけ10本買ったのだ。団子なので早食いするわけにもいかない。詰まらせたら大変だろ？でも確かに。

店には持ち込んじゃいけねーよなー。

「じゅめん。すぐ出る。」

「えっ、ゆっくり話したいのに。あ！そつだお客さん待たせてるんだった！すいませーん！」

そう言いパタパタ遠くの方へ走っていく。
おいおい、お客放っぼったらだめだろ…

「知り合いだったのか？もう少しゆっくり話しても構わないぜ？」
「いえいえそんな…」

どうやら男の客らしい。どれ、少し顔のぞいてみるか。

ちょこつとのぞいてみる。

若い男で、金髪の少しはねた髪。フードにファーのついたコートを
着ていて、まあそこらにいそくな若者って感じだ。

でも…

どっかで見た事があるような…

・ ・ ・ ・ ・

「あ————！！！！！！」

突然叫んだ蒼に驚く人々。

「お前あれだろ！！なんだっけ、キャバッローネとかいうマ…」「ちよつと来い！」

蒼が言い終わる前に金髪男に連れ出される。

店を出ようとその男が蒼をつれてドアを開け出ようとする。

ガッ

男が店のドアのわずかなでっぴりにつまずく。

あー……じし……

ドジなんだっけ……

「お前何もんだ？」

「そこらへんにいる一般人。」

あからさまな嘘をついてみる。ホントの一般人ならそんな事知らないわな。でもそりゃ漫画で見た顔そのまんまの人が目の前にいたらねえ…？

「嘘だろ。一般人が知ってる情報じゃねえ。何処のもんだ。」

こっわーい（笑）もう疑問系じゃないし。でも

「さーな？てめーに教える義理はねーよ。一般人にもバレるようなセキュリティなんじゃねえの？」

少し笑ってから言う。これは少しずるいかも。実際ハッキングしたわけじゃないし。今度してみようか。結構得意なんだよねー

はたしてホントにキャバツローネのセキュリティは甘いのか！！気になるー

「ま、いや。これからも会うかもしんねーからそんなときはよろしくなー」

ヒラヒラと手を振り驚いてるような怒ったような顔のディーノを置いてマキの店に戻る。

「蒼ちゃん、お客さん連れて何処言っただの〜？おつり返してない！」

店内に入るなりマキに問われる。

「帰ったぜ？つりなら貰っちゃえば？帝、武、帰ろーぜ。」
そう言っってまた店を出る。

「悪いな山本。うちのわがままお嬢様が。」
「にぎやかで楽しいのな！」
心の広い山本達でした。

ちなみにこの後ディーノはツナの家に行き、ツナと初対面した後、
そのドジっぷりを発揮するのだった。

第15兩

オレ、ドジ野郎と会うー!! (後書き)

今回は長く書けたかな？

デイーノ出てきましたねー。キャラ違ったケド…

蒼と仲良く(?) になりましたねー。キャラ違ったケド…

第16巻

オレ、マフィアランドへ！

「あ———」。

「暇！」

蒼のこの言葉が始まりだった。

「いや暇って言われてもな。今日休日だし。」
帝はメガネをかけ、雑誌を読んでいる。

「何かこう、ズガンズガンって感じの事おきねえの?!平凡！」

前跳ね馬に会ったけど結局何もなかった!」

「いや、ズガードゴーンてのが起こる方がおかしいと思うけど!」

「うっせ、黙れ!メガネ似合っていないんだよ!」

「今日初めてかけたんだよ!黙れメガネっ子!」

「これはパソコン代わりだ!へッ、自分が似合わねえから悔しいんだろ!」

蒼が帝の方に前かがみになり、メガネを少し上にあげる。

確かに蒼のメガネには度が入っていない。実際は目がいいからだ。

「そーだ!このメガネで原作読んで今日何かやってないか調べてみつか。」

そう言いメガネの電源をつける。

「えっと…これは一週間前…これが二日前…今日は…」

マフィアランドだ……！」

「着いた????!マフィアランド!?!」

原作によると今日この『裏マフィアランド』ってとこでみたいなの戦争が起
こるらしい。そら行くしかねーだろ!あとなんかコロネロとかいう
狙撃手も強いらしいし?来るしかないっしょ?

「こつなると思ったから言わなかったんだよ…」
どつやら帝は今日戦争がある事を知っていたらしい。言ってくれ
ばいいのによー。

うし。裏マフィアランドに向かうか。

ズガン!

ズガガン!

「うし。あつちか」

「おいちよつと待っ!」

「……いねえし。オレは何も知らないオレは何も知らないオレは何も
……」
帝はそう言いマフィアランドの喫茶店に向かった。

後でマフィアランド全体の騒ぎになる事を忘れて……

蒼はもう裏マフィアランドまで来ていた。

「おーおーやってるやってる」

木の上からリボーン、コロネロ、ツナのやり取りを見ていた。

「確かあのバンダナ巻いたライフル小僧がコロネロだったよな…よし！」

蒼は二股に分かれた木の枝を折り、下の小石を拾った。そして髪の毛をちぎって二股に分かれた枝の両端に結ぶ。

いわゆるパチンコをつくった。

「さあーで、実力はどれほどか…な！」

小石がとてつもないスピードでコロネロに向かう。

「誰だコラ！」

コロネロが石の方向に銃を構える。

ズガガン！

一つの弾は石に。

一つの弾はさつきまで蒼のいたとこに。

「さつすがー…アルコバレーノ。」

「オレの弾を避けるとは何者だ！コラ！」

木から降りていた蒼が三人の方に歩いていく。

「き、霧沢さん！？なんでここに！？（髪ほどいてたから一瞬誰だかわかんなかったよ）」

「うるさい」

そう言いコロネロの方に歩いていく。

「なあ。あんた最強なんだって？」

「だったら何だ！コラ！」

「オレと狙撃の勝負しようぜ」

「乗ったぜ、コラ！」

コロネロが笑って答える。

場所を移動し、蒼の分のライフルが用意される。どつやどつやはシ

「コミレーションルームというらしい。部屋はムダにだだっ広く、真つ暗だ。パツと明かりが着く。」

「おお〜」

なるほど。こつこつこつとか。

部屋に明かりが着くと周りは高層ビルの中だった。

「ここではあらゆる状況で殺しの訓練ができるんだぞ」

「何物騒な事言ってるんだよ〜」

沢田は相変わらずおどおどしてる。

「ルール。どうする?」

「それはオレが決めたぞ」

そう言いりボーンが蒼の目の前に来る。

「ここでお前とコロナロが順番に撃っていくんだ。ターゲットはどんどん遠ざかっていくぞ。ターゲットを撃ち抜けなくなったら負けだ」

「賛成」

「オレも賛成だぜ、コラ!」

「じゃあ始めるゾ。まずは2キロからだ」

「んじゃオレから」

ジャキ

蒼がライフルを構える。

さあさあ楽しい時間の始まりだ

第16兩

オレ、マフィアランドへ！（後書き）

長くなっちゃうのでいったん切ります！

コメントくれたらうれしいです！

なんて…

第17兩

オレ、コロネロと競う!?

?マフィアランド?

?喫茶店にて?

「ふー。」

帝はカフェオレを飲んでくつろいでいた。

「蒼がいないとこんなに静かなんだなー。」

そう言い空を見上げる。

「今頃蒼は裏マフィアランドで暴れ回って破壊しまくってるんだろ
うな……」

ズガガンッ

「蒼、50kmクリアだぞ。次はコロネロだ」

ズガガンッ

「コロネロもクリアだ」

帝の予想は半分当たってるが半分ハズレだ。確かに蒼は暴れていたがシュミレーションルームのおかげで破壊はしていなかった。

「次は65kmか。絶対勝ってやる」

蒼が銃を構える。

「（ひい）。1km先の人を撃ち抜けるだけ十分スゴいよ!!!」
ツナは二人が撃つたびに「ひい!」とか「ひゃ!」とか情けない声

を出していた。

「(ったく、男のくせに)」

蒼が呆れながらスコープをのぞく。

「ふっ」

ふいに蒼が笑った。ツナは不思議の思い首を傾げる。リポーンはニツと笑った。

「(アハハハハ！ヤバいこれウケる！ターゲットが沢田！？)」
そう。ターゲットの顔は毎回変わっていたのだが沢田の顔に変わったのだ。

「ツナも見てみるか？」

リポーンに双眼鏡を渡される。

「んなーーーーーー！？なにこれ！オレ！？」

沢田は相当驚いたようだ。

ズガンッ

それでも容赦なく撃つ蒼。

「あー！オレー！ー！ー！！」

双眼鏡をのぞきながら再び叫ぶ沢田。

「フンッ」

蒼はライフルを片手で持ち、肩に置いてもう片方の手で腰上まである髪を払う。そしてコロネロに挑戦的な目を向ける。

「次はアンタだぜ」

「上等だ！コラ！」

コロネロが的に銃を向け、引き金を引いた??????

ドガアアアアンー！！

「う、うわあ！何だ？」

沢田がうろたえる。リボンとコロナは慣れているのか冷静だ。

「（来た来たあ でも知らないフリしねーと…）戦争か！？」

「こんなことすんのはあいつくらいだぜ！コラ！」

「そーだな。アルコバレーノ

スカル。」

「そんじゃ、オレは…全滅させてくる」

「「「!!!?」」」

「大丈夫大丈夫!殺しはしねーよ!」

「そーゆー問題イイイイ!???」

さてさて勝負は持ち越し

「楽しいショーの…始まりだ」

第17兩

オレ、コロナロと競う!? (後書き)

こんばんは！更新遅れて本つつ当にごめんなさい！！

わたくしの成績が…悲劇を起こしているため、更新が遅れてしまいました…

これからも遅れる事もあるかと思いますがよろしくお願いします！

帝：ていうかオレ全然出てないー！

次はトップバッターでだしてあげますよ。

蒼：ていうか短っ…

すみません…次は努力しますー！

第18兩

オレ、戦争に参加？

？喫茶店？

「戦争だー！！」

「！？」

男が叫んで店内に入ってくる。外も騒ぎになっているようだ。そりや騒ぎになるだろう。戦争なのだから。ならなかったら日本国民はどうかしている。人々が悲鳴を上げて店の外に逃げる。

「客は広場に避難しろ！その他はマフィア城に逃げ！！」
奥からその店のオーナーが出てきて呼びかけるが客は逃げ惑うばかり。

「そつだ…今日は戦争の日なんだっけ…だから蒼があんなにイキイキしてたのか…あー…もう！

蒼が嬉しそうにしてる時は悪い事しか起こんねえよな」

カフェオレを飲んでつぶやく。結構砂糖を入れたはずなのに少し苦かった。

「あんた！そんなに落ち着いてるってことは関係者だな！？マフィア城に行くぞ！」
さっきのオーナーが近づいてきて帝に話しかける。

「え、いや、違…」
「久々に銃がぶっ放せるんだ！腕が鳴るぜ！なあ！？」
断ろうとした帝の声を遮るようにオーナーが言い、強引に帝を連れて店を出る。

「だから……違っつっつてんだろー……!」
そんな叫びも銃声で空しくかき消された。

「おーおー、良つく見っえるー」
マフィアランドで一番高い木の上に立つ。ちょうどスカルの艦隊とマフィア城の間くらいなので双方の動きがよく見える。スカルの方を見ると大ダコを連れて船から降りるところだった。マフィアランドの方ではツナが最前列に立たされ、もう顔真っ青。

「んー。まずはスカルの部下でいつか。」
蒼は木から降り、スカルの艦隊から5キロほど離れた所に移動した。

「さてさて…まずは姿を見せとかないと…ね！」
息を思いっきり吸って…

叫ぶ。

「無能なアルコバレーノの部下さーん！これからあなた方の艦隊を沈めます！命が惜しけりゃ避難しなさーい！」

蒼の声はとても良く通り、部下達にも聞こえたようだ。

「沈める！？」

「まじかよ！降りようぜ！」

「待てよ、あんなところから撃てるわけねーだろ。当たんねーよ」
ブツブツつぶやいていたが最後に言ったやつのかえに同感らしい。

「はあ？おれの弾がてめーらのとくに届かない？オレの愛用ルベル M1886なめんなよっ！」

ガンッ

弾が船に向かっていく。

ドガーーーーン

「な、なんだ！？」

「エンジンが狙撃されたようです！」

「消火だ消火！早くしろ！」

「間に合いません！」

急に騒がしくなってきた艦隊。

「わー、これだけでこんなに騒ぐとは。驚きー。他の船の部下達にも下船してもらわねーと」
機関銃に持ちかえる。

「さてと、お次ぎはM60機関銃で！」

ズガガガガガガガガガガ

連射し続ける。そのたびに艦隊の方からは爆発音が聞こえてくる。

「ふー。終了！艦隊、全滅！」

沈んでいく艦隊を見ながらつぶやく。

「あらら。思ってたよりヒトが多いなー。スカルと大ダコはもう行っちゃったし？」

「ザコを沈めるか。」

スカルの手下、150人くらいは沈んでいく船を呆然と見ていた。

「な、何だったんだ…まさかあの距離から！」

「まさか全部のエンジンを狙撃されて沈められるなんて…」

「とにかくスカル様にお知らせしなくては！」

部下の中のリーダーがスカルの向かった方を向く。

「行かせるわけにはいかないんだなあ」

蒼が立っていた。

「そこをどけ！」

「だからどかないっての。」

「なぜだ！」

「行かせたら多分スカルにオレの事知られちゃうでしょう？そしたら原作が変わっちゃうかもでしょう？そしたらヤバいの。オレも天野 先生に怒られちゃうかも shouldn't でしょ？」

「?? 知らんが の意味がない気がするんだが……」

「! ; ; ; ん、んな事いいだろ！話をそらすな！」

「お、おう。」

「そんなわけで！」

ちよつと痛いけど、我慢しろよ?。」

何処からともなくクナイを取り出す蒼。どこからそんなにクナイが出てくるのか聞きたいところである。獄寺も同じだが。

「雨風！」

次の瞬間蒼の手からクナイは消えていた。部下達は惚ける。

「何をしたんだ？」

「失敗か？」

次の瞬間

部下達の足から

紅い血しぶきがあがる。

「!?!」

「ぐああ！」

「ぎゃあああああ」

次々と倒れていき、もがき苦しむ部下達。

「大げさな。足だし手加減してやったんだ。殺さないって言ったやつたしね。」

そう言うつとスカルの言った方を向く。

「オレも向こう行こー。」

蒼が歩き出す。

血溜まりを後にして。

第18兩

オレ、戦争に参加？（後書き）

やっとアップできました！マフィアランド長いな…

次で終わらせます！

んで…

黒曜編です！

第19兩

オレ、ケンカに参戦！…未遂？

スカルの部下達を残し、蒼はスカルを追う。

「んー。まだ終わってないといんだけど。」

蒼は漫画の原作で見た場所に行ってみる。

そこには大ダコと大ダコに捕まってるリボン。

「あらら。アルコバレーノもこんなもんか？」

蒼は木の上から見物する事にし、頬杖を着いて眺めている。

ズガンッ

リボンがタコの腕の隙間からスカルに向かって銃を撃つ。

「!!!」

これはスカルも考えていなかったように左腕に弾が当たる。リボンが撃つたのは特殊弾。スカルの左腕はふくれあがり、大ダコはスカルの命令がわからずオロオロ。

でかい図体してオロオロしてんなよ。

蒼は呆れながらその様子を眺める。

「くそつ。こうなったら艦隊で！」

「残念だったなスカル。艦隊なら今コロネロがつぶしにいつてると

ころだぞ。」

「え。コロネロ先輩が!？」

「その必要はなかったぜ、コラ！」

コロネロがワシにつるされて?戻ってくる。

「どういうことだ？」

「オレが行った時には艦隊はもう沈んでて血溜まりと苦しみもだえる奴らだけだったぜ、コラ！」

「血溜まり……!?!？」

沢田が青ざめて絶叫する。

たびたび思うのだが近所迷惑の通報とか来ないのか?あ。ここは森か。でも絶対一回は来てる。

おっと、話がそれた。

「だろうね。艦隊はさっきオレが沈めたし。血溜まりはメット野郎の部下のдар。殺さないように足撃ったからな。手加減してやったんだ、感謝してほしいね。」

蒼は腕組みして言う。スカルは艦隊が沈められた事が信じられず全く動かない。

「まさか本当に全滅させてくるとは思わなかったぜ、コラ！」

ようやくスカルが我にかえる。正直遅すぎ。

「ハッ。オ、オレの部下をやったのはテメーか！コノヤロー！か、
覚悟

バンッ

スカルのすぐ後ろの木に弾がめり込む。10mほど離れていたが蒼にとつては1m先のダーツに矢を当てるようなものである。スカルの頬に冷や汗が伝う。

「黙れ？」

蒼がにつこり笑ってスカルに言う。沢田はヒーヒー言ってさらに青ざめているが知ったこっちゃない。蒼は銃をしまい、マフィアランドの方へ歩いていく。

「じゃーな。お先に。帝が待ってるんでな。バンダナ小僧との勝負、
楽しかったよ。」

「お前もなかなかだったぜ、コラー！」
そりゃどーも。ひらひら手を振り歩いていく。

「やっぱりあいつおもしれーな。ファミリーに入れるぞ。」

「えー……！！？き、霧沢さんを？！ムリムリムリムリ絶
対入ってもらえないよー！！ていうかオレボスになんないし！！」

「黙れダメツナ。」

「ひい！す、すいません……」

マフィアランドの喫茶店に行ってみると帝がカフェオレを飲んで
いた。

「お前ホントツット、トラブルメーカーだな！」

「別に今回のことは元々起こることだったし。帝に迷惑かけてね
し。」

「お前には何言ってもムダだったな。」

帝はため息をつき、飲み終わったカップを置く。

「帰るか」

「おう」

二人でマフィアランドを出る。

日はすっかり沈み、

大騒ぎの一日が終わる。

はずだった。

「はーらへったあはーらへえたー。おこしにつけたきびだんごー。ひつとつーわたしにくださいなー。あーげまつせんーあーげまーせんー。おこしにつけたきびだんごー。あなたーにあげるーわっけがないー」

「…あげないの？」

「あ？」

「いや、きびだんごあげればよくね？元は桃太郎の話だよな？桃太郎仲間できないよ？」

「知るか。あげたら自分の分なくなっちまうだろ。」

「えー……」

「それに食いもんで釣るってのもひどい話だろ」

「…確かに」

「…納得しちゃうのかよ…」

帰り道。そんなたわいもない話をしていた。

んー…きびだんごとか言ってたら腹減ってきたな。

「帝。腹減った。コンビニ寄る。先帰ってて。」

「へいへい。ロボットかよ。一文でまとめろ、一文で。」

「帝ー腹減ったーコンビニ寄るー先帰っててー」

「伸ばしただけじゃねーか!」

そんなこんなで別れた二人。蒼はコンビニに向かって歩いていく。辺りはすっかり暗くなってるので街灯の光だけがたよりだ。

「ん?誰がいる」

街灯の下で二人の男がもつれ合ってる。制服を着ているところから蒼と同じ年くらいらしい。

ケンカか…

「加わるしかないっしょ!!」

自然に二人に近づいていく。

「ひ、ひいいい！ホ、ホント勘弁してください！」

「んあ！？んな事言われても上からの命令なんら、仕方ないびよん
！」

ん？この馬鹿な言葉使い聞き覚えがあるな…？

第19兩

オレ、ケンカに参戦！…未遂？（後書き）

中途半端ですんません！あの言葉使いつていったらあいつですよね。
あんな言葉使い
の人そうそういませんよね。

お時間ある方はコメントお願いします！

第20兩

オレ、ケンカに参戦!!まじで!

聞き覚えのある話し方に疑問を抱きながら蒼はまたポニーテールに髪を結び、キャップを深くかぶる。

「お兄さん、面白い事してるね。オレも入れてよ。」

「んあ!?!なんらテメー!」

「さあね?通りすがりの人?」

蒼は笑いながら首を傾げる。すると殴られていた方の男が目を見開く。

「お、お前霧沢!霧沢蒼か!?!」

男が蒼を指差して言う。

なんで知ってるんだ?知らねんだけど こいつ。

「?誰だてめー」

蒼が屈んで男の顔をよく見ようとす。

「!ああ。あんた風紀委員か。」

腕に腕章がついてる。雲雀サン関連か。それにしても何でわかったんだ?

「何で風紀委員サンがオレの顔知ってるわけ？」

「い、委員長が、霧沢蒼を見つけたら連れて来いと…」

あー。納得。

「よーするに。リベンジってわけね。なーる。前世ライオンが負けて黙ってるわけないわな」

蒼のこの言葉を聞いて変な言葉使いの男が蒼の方を見る。

「！？てめーがアヒルに勝ったびょん！？」

「？ああ。（だーれだったかな？こんな言葉使い忘れるはずないんだけどな…）」

「…予定変更だびょん。まずはてめーをぶつ殺す！んれ骸様の土産にするびょん！」

骸…？

「あああああああ！…！」

二人が飛び上がる。

「おっもいだした!!お前、あれだろ!ナツポーと一緒にいたあの犬!あー!そうだそうだ!すつきり!」

あーホントすつきり!それじゃあ…

「ケンカ……しよつぜ」

そうそう。原作読んだ時にいた。新人類？みたいな生き物。

「コングチャンネル！」

わお！ゴリラになった！すんげー！最早人類じゃないかも…

おおおお攻撃してきた！ふーん、カモゴリラと同じくらいになるんだ…

地面凹んじやったよ…

のんきな事を考えながらゴリラの攻撃を避け続ける。簡単な気がするが実際ゴリラの攻撃を避けるのは至難の業だ。

…と蒼が言っていた。

「避けてるだけじゃ勝てねーぞ！？」

（？）（？）？喋った！！！！え、ゴリラ姿でも喋れるのか！？…こい

つ絶対動物園で働いた方がいい！『喋れるゴリラ』って絶対儲かる。オレが売りつけてやりたいくらい。

あ、今戦ってる最中なんだっけ。

確かにゴリラの言う通り避けているだけでは勝てない。疲れさせてから倒すのもいいがゴリラのスタミナが切れるのを待ってたら朝日が昇ってしまうだろう。

ゴリラって毛深いし手加減はしなくていいよな。

「んじゃお言葉に甘えて。」

シャキッ

何処からともなくクナイを構える。

「雷蝶ライコウテフ！！」

大量のクナイがゴリラに迫る。

ドドドドドドドド

「?!!」

そのクナイのすべてがゴリラに命中し、

血が噴き出す。

それでもゴリラはまだ倒れない。

「!まだ倒れねーか。さすが頑丈な身体してやが

ドサッ

ゴリラが仰向けに倒れる。

「フー。良かった。ホントに化けもんかと思った。∴でもまだ意識はあるか。」
蒼がゴリラの傍にしゃがむ。

「ゲッ、バレたびょん。」

「別にとどめを刺す気はない。こんなとこに死体なんて転がってた
ら問題になるだろ?」
「一つ質問したいだけだ。」

「あんな名前なんだっけ。」
「…んあ」

「いや、悪い。一回聞いた事はあるんだよ。でもなんか思い出せないよ。動物チックな感じの…」
「（動物チックってなんだびよん）…犬^{けん}」
「そうだ！犬^{いぬ}だ！ワン公！OKOK！」
「いや犬^{けん}らって言うてるびよん！」

「ワン公の方がかわいらしくていいぞ？」

「可愛さ求めてるわけじゃないびよん！」
「わかった。犬^{いぬ}」

「犬^{けん}らっつつの！」

「めんどくせーな、ちっせーことは気にすんな！
そう言いうつぶせになってる犬の腹を叩く。」

「つつつ！！？」

「あ、わり。ケガしてたんだっとな。だいじよぶか？」

オレがつけた傷だけど…ま、まあ気にすんな！正当防衛だ！……過
剩防衛か？

「そーだ。ナツポーによく伝えといて。あと。この顔よく覚え
ときな。近いうち会う事になるだろうしな。」

蒼がキャップをとる。犬が自分の顔を見たのを確認するとまたキ
ヤップを深くかぶる。

「じゃーな。ワン公。無理せず帰れよ。」

「無理なんてしねーし！」

ヨロヨロと犬が立ち上がる。そしてフラフラ歩いていき

…電柱に激突。

「！ハハツ『犬^{いぬ}も歩けば棒に当たる』」

「うるへー！」

そう言い家に戻ってく。

「ていうか帝って一応神なんだしお金くらい作れんだろ。」
「あ……オレって神だっけ……」

いや。それ以前に金は作ってはいけないかと。

長い一日がようやく終わる。

第20兩

オレ、ケンカに参戦!!まじで!(後書き)

こんばんは!お久しぶりです。

これからテスト期間のため更新が遅れます!すいません…

コメ&感想よろしく願います!

第21兩

オレ、浅野にいらつく

…何これ。なんでオレはたくさんの

風紀委員に囲まれなくちゃいけないかな。

オレこんな人相悪い人達にモテても嬉しくもなんともないんだけど。

今日は黒のパーカを着てきていたのでフードを深くかぶる。

「…なんかオレに御用で？」

「委員長がお呼びだ。応接室に來い。」

リーゼントが一番長い人が答える。

リーゼント長過ぎね？最早武器になるよアレ。頭突きしたら絶対刺さる。

…ヤバイ、笑えてきたww

「断るって言ったら？」

風船ガムを膨らましながら聞く。

「力ずくで連れて行くまでだ。」

あ。割れた。

「交渉決裂だな」

風紀委員の人達が一気にかかってくる。

さすがに校内でクナイはヤバイよな。今度学校でも使える武器考えねーと。雲雀のトンファーとか考えたよなー。アレ打撃だし。斬撃は問題になりそう。

ん?…何にしょ。

そんな事を考えてる間にも風紀委員が迫ってくる。

「あーあ。ご愁傷様。委員長の言う事聞かなかつたら無事だったのに。あ。でも断つたらそこで雲雀サンにやられちゃうのか。うっわ、かわいそ。」

「(くそっ、なんでこいつこんなに余裕なんだ!?)」
風紀委員の攻撃は空ぶるばかりで疲れてきたのか息が上がってきている。

「ハーツハーツ。つくそ!」

蒼は余裕ちやくちやく。でもやはり暴れたいらしく、指をコキコキ鳴らす。

「まったく…今日は予定があるつてのに…反撃開始!」
その後は10秒程で終わった。周りの人達は途中から恐ろしくなり、裏門から登校する始末。

まあ、当たり前か。

倒れている数十人の内の一人の襟を掴み、立たせる。…最早吊るさ
れている状態で立っていないが。

「アンタらの委員長に伝えな。『霧沢蒼を呼びたかったらテメーが
来い』ってな。」

そう言い手を離す。その委員が崩れ落ちる。

「風紀委員も弱すぎだよ。もっと強くしとかないと。」

懐中時計を取り出す。

30分経過していた。

「あーあー。もうこんな時間だ。一回武とか隼人に会ってから行こ
うと思ったんだけど会う時間なくなっちゃった。何のためにガッコ
来たんだか。」

校門を出て行くこととする。

「ま…待って！」

あー。オレが一番聞きたくない声だ。

「何の用。……浅野望。」

振り返ると浅野が立っている。

オレなんかしたか？

「あの…あなたも“転生者”でしょ!？」

「だったら?」

「えっと…その…」

声をかけたところまでは上手くいったが、その先どついう風に言うか決めていなかったらしい。モジモジして中々言おうとしない。

ん…。段々いらついできたぞ

「何?」

「あ、あの!転生者だったら!あまり原作を狂わせない方がいいんじゃないかな、って…」

はあ？いきなり何言い出すんだこいつ。最後の方あんま聞こえないし。

「主要人物とかに近づきすぎたら物語変わっちうかなって…」
ああ。『主要人物』って武とか隼人とかクロームとか？ははは！…
馬鹿らし。

「なにそれ。馬鹿らし。自分の生きたいように生きて何が悪いわけ。」
「
言っでやると反論されるのに慣れていならしく、身じろぐ。」

「でも、でもこの世界にはシナリオがあるから！変えたらダメだよ。」

あー。もうダメ。

「さつきつから“物語”だの“シナリオ”だの何なんだよ。先は誰にもわかんねえつてのによ。オレらはまあ原作読んじまったけどその通りに生きてるだけなんてただの人形だ。」
「でも私たちは他の世界から来たんだし…出しゃばらない方が…」

もうさ…本当なんなのこいつ。死んだ奴の身にもなってみろつての。
蒼はわざとらしく大きなため息をつき。腕を組む。

「オレは転生したんだ。アンタさつき『あなたも』つつつたよな。
一緒にすんなよ？」

片足重心で笑いながら言う。呆れからくる笑いだ。

「あなたは“トリップ”だろ？いずれはもとの世界に戻んだよ。旅行したら元の場所に戻ってくだろ？オレは転生だ。意味わかるか？」
浅野は全く意味が分からなかったらしく、首を横に振る。

「だよな。おれは転生つつたろ？一回死んだんだよ。」
浅野が水を打たれたような顔になる。まあ、神サマの間違いだったらしいけど、と付け足す。

「間違いでも死んだって事はもうその世界にいれねーの。今頃オレらのいた世界ではオレの葬式でもやってるさ。」
浅野は下唇をギュツと噛む。さっきの“戻らなきゃいけない”というのがひっかかっているのだろう。

「アンタが武の事をどう思ってるかは関係ねーしどうでもいい。オレの事が邪魔だったら消せばいい。たぶん“ヴァリアー編”とやらで敵になる可能性は高いからな。まあ勝てたらだけどな。」

武の事は凶星だったらしく。赤面してうつむく。

「じゃ。オレ用事あつから。」

今度こそ校門を出、歩いていく。

残された浅野は怒りで拳を震わせていた。

なにあれ。何あれ何あれ何あれ！『武の事をどう思っただけでも関係ねえ』！？武君の事馴れ馴れしく武なんて呼ばないで！きつと武君は優しいからしょうがなく付き合っただけあげてるんだよ。

あ…。そうだ…。あいつも言っただ…。

ヴァリアー編であいつがヴァリアー側に行ったら、私はボンゴレ側であいつを消せる…。

誤って攻撃するところを間違えて。

泣いて謝って。

それで武君に慰めてもらおう。

最高の手じゃない？これこそ一石二鳥ってやつよね。

それまでの辛抱よね？

狂い始めた醜い少女。さてさて彼女の行く末は？

一方蒼は一人歩き続け、とある場所にたどり着いた。手みやげを持ち、建物の真正面に立つ。

「やっと着いた…」

「黒曜ランド」。

第21兩

オレ、浅野にいらつく (後書き)

こんばんはー。今日は霧宮に変わって蒼がこのコーナーをやる事になりましたー。

どんだけめんどくさがり屋なんだよこの作者。

ていつか『霧沢』と『霧宮』ってなんかかぶってね？パクリだパクリ。

今回は結構長く書けたと思います。これからも読んでくれるとうれしいです！コメントも良ければお願いします…。あおもお便りお待ちしております…？

って霧宮！何言わすんだコノヤローー！！

すみません。読んでくれてありがとうございます！

霧宮。

第22雨

オレ、骸に会う！

黒曜ランドに入っていく。原作通りオンボロである。お化けでも出てきそうな雰囲気である。

「確かほぼ最上階にナツポーはいるんだよな。」
階段へ向かう。階段に行き着いてみると既に破壊されていた。確か沢田達が来るから一カ所以外ぶつ壊されたんだっけ。

∴その一カ所探すのちょーーーーーめんどい。

飛ぶか。

階段はおよそ3mくらい壊されていて、オレの手を伸ばした時の身長は2mとちょっと。つまり1mくらい飛べばいいんだろ？

らくちんらくちん

まあヴァリヤーとかいう奴らにはおよばないかもただけで飛ぶ事に関しては自信あるんだよな！

あれ。

ヴァリアーだっけ。

どっちでもいつか。

蒼は軽々と階段を飛び、さらに上へと進んでいく。そして???映画館へとたどり着く。確かここに集まってるんだよな。

ギイイイイー…

ドアを押す。不気味な音をたてながらドアが開く。奥にはソファ。

そのソファの背もたれの上には…

「パ…パイナップル？」

パイナップルが乗っていた。

何で背もたれの上にパイナップル？何あの絶妙なバランス。暗くてあまりよく見えないがあれは絶対パイナップルだと思う。うわっ。パイナップルが動いた！

パイナップルが浮いたかと思ったら首、胴体という風に全身が見えてきた。どうやら人の頭だったらしい。

頭部らしからぬ頭部である。なんとややこしい。

ナッポー頭が近づいてくる。

「クフフフ…第一声がパイナップルとはなめられたものですね。」
近づいてくるにつれ、顔が見えてくる。確かに原作通りの顔である。不細工ではないらしい。

つまんねーの。

ていうか、なめるも何も純粹な感想を述べたまでであって。それにしてもなんて見事なパイナップル…。影絵のパイナップル役に適任だと思っただが。

「声に出てますよ。」

「まじ？どのへんから？」

「『ていうか』から全て。」

「まじ？思考回路丸見えじゃん。」

「今日は何の御用で？」

ああ、そうだった。用があつて来たんだよ。

「契約。」

「ほう、どのような」

ナッポー頭がソファの方へ戻っていく。

蒼もソファの方へ近づいていく。

「一人の女についてだ。」

ナッポー頭がソファに腰をかけ、足を組む。

「一人の女をお前の仲間に入れてやってほしい。」

一人の女とはクロームの事だ。

始め会ったときに気がついた。まだクロームはナツポーと出会ってないはずなのに

クロームはもうクロームだったんだ。

凧だったころクロームは大げがし、一部の内蔵と右目を失った。

まだナツポーと出会ってないとしたら彼女の内蔵は誰が？

誰がクロームの内蔵を作っているかは知らない。

でも確かなのは原作でクロームがナツポーを本気で尊敬してた事。

そしてオレのせいで変わってしまったかもしれない事。

クロームのナツポーに対する気持ちは変わってほしくない。

ましてやオレのせいで。ナツポーは一瞬驚いた顔をし、大爆笑した。

「クハハハ！何を言われるかと思えば！無理な相談ですね。」

「待てよナツポー。条件も聞いてみたらどうだ。」

「待ってください。何ですかさっきから人の事を“ナツポー”
ナツポー」と

「ん？ああ、悪い。ナツポー星人の方がよかつたか？」

蒼は少しずつ立つのに疲れてきたのか片足重心で腰に手をあてる。

「いえ、僕は“ナツポー”につっこんでるんです！というか星人て
なんですか星人て！」

「見事なナツポーだったからつい、な。その葉っぱの部分がアンテ
ナでナツポー星と交信してるんじゃないのか」

「いえ、僕には六道骸という名があるんです！これは葉っぱじゃな
く髪です！アンテナでもありません！」

「そ。つまんねーの。」

骸は息が上がり、ぜいぜい言ってるが蒼は澄まし顔でまた風船ガム
を噛む。

「話を戻すぞ。こちらの条件を聞く気は？」

「わかりました。聞きましょう。」

「?????????????。」

ニヤリと笑いながら蒼が言う。

「…そんな事が可能だと思ってるんですか。」

「あなたの髪型が可能ならこれだって可能だろ。」

「クフフ…。いいでしょう。契約成立です。」

「形だけでなく。だぞ」

「もちろんです。」

「感謝する。あなたと似た境遇の子だから心配することはないだろ

う。」

たがいにニヤリと笑いながら契約を交わす。契約方法は裏社会での一番重い契約。焼き印だ。

人に関わる事だし当たり前だろ。クロームの為ならなおさらだ。

「焼き印は」

「こちらで用意してありますよ。」

そう言い骸が焼き印を持ってくる。赤く燃えてる。

ジュウウウ

「っっ！」

さすがに蒼にも神経はあるわけで痛い。

ドクロのマークが手の甲側の手首につく。

その後骸も同じ事をする。

もちろん幻覚でない事を確認して、だ。

「…一つ聞いてもいいか。」

「なんですか。」

「何でここまででした？こちらとしてはありがたいが、お前からしたら見ず知らずの奴との契約だぞ。」

「…ただの勘ですよ。」

「そっか」

蒼は映画館から出て行く。

「犬。」

「あい。なんれすか」

「本当にあの人はですね」

「ほんどれすって！今度ばかりは！柿ピーも実は影からあんどき見

てたつしよ！？骸様に言つてびよん！」

「めんどい」

「クフフ…千種が否定しないという事は本当なのでしょう。強い者と契約を結んどいて損はしませんからね」

「あ！手みやげ渡すの忘れた！」
せっかく妻チヨコ買ってきたのに。

「…蒼！」

少し控えめな声で呼ばれる。

「クローム！久しぶり」

「うん！…話して…何？」

クロームにはメールして初めて会った公園に来てもらった。メアドは初日に交換したんだ

「あのさ、明日から黒曜ランドに住んでみない？」

「…え？」

「いや、一人で住むわけじゃないよ？もちろん人がいるんだけど、クロームと気が合いそうっていうか…クロームもその人にたくさん教えてもらえることがあるかなって…」

上手く言えず、ポリポリ頭をかきながら苦笑い。

だがクロームも少し考えた後、顔を明るくして

「…うん。その人と一緒に住んでみる。蒼がそう言うんだし…悪い人じゃなさそう。…もともと黒曜ランドの近くに住んでたし…」

「そっか！良かった。いきなり知らない人と住むってのも変な話だから心配だったんだ。」

それじゃあ明日一緒にその人に会いに行くと約束し、別れる。

クロームも気に入ってくれるといいんだけど…

第22兩

オレ、骸に会う！（後書き）

こんにちは！

なんかめっちゃ長くなっちゃいまして…読みづらくて…

でも頑張りました！

蒼：長過ぎて飽きる。

ひどっ！ここまで読んでくださった方ありがとうございます。時間があつたらコメよろしくです！

蒼：毎回同じ事言ってるし。

…いいの…コメ欲しいんだもん！すごい励みになるんだもん！もうマジ泣きもんよ！

蒼：かわいそうな作者。

すみません、ありがとうございます…

第23兩

オレ、目覚ましたらいぢく！

あつさでっす、あつさでっす、あつさでっすよー！
あつさでっす、あつさでっす、あつさでっすよー！
あつさ」うるせー！……！……！

バキヤ

「ハアハア…何だこりゃ。」

朝。蒼が起きたのはドラ もんの声だった。

ピ…ガガガ…やっと起きたね チャンチャン バチッ

そして今蒼の前にあるのは

無惨につぶれたドラ もん。

の目覚まし時計。

「みーかぁどー……!!」

バン!

蒼がリビングのドアを開け放つ。

「あ。蒼。はよー。」

帝はとっくに起きてトーストを食っていた。

「何だよこの目覚ましー!」

「ああ、それなんかヨーグルトの抽選出したら当たった。蒼に始めに試させてあげようと思って……って

『あつさです、あつさです、あつさですよー！』だぞー？

しかもボタンの上から潰したら起きたと勘違いして

『やっと起きたね チャンチャン』だぞー？うぎってー！とこの
上ねー！！」

「うん。それは壊して正解だった。」

「だろ」

そう言い、蒼がふいに時計を見る。

9 : 5 4

「うそだろ、もうこんな時間！？クロームとの約束が10:00だつてのに！」

蒼は急いで白い長袖に黒のパーカー、下にはジーパンを着、ジャムをつけたトーストをくわえ、家を飛び出す。

「あ、そうだ、帝！雲雀サンには『霧沢はインフルで休みです』って言っというて！」

「あ、おい！そんな事言ったらオレが噛み殺されんだろ絶対！って聞いちゃいねーし……」

帝が見た先にはもう蒼はスケボーを持って出て行った後だった。

?公園?

「蒼…遅いな…」

クロームが時計を見る。

10:14

クロームは黒曜の制服できていた。蒼に買って貰った服もあったの
だが初めて会う人だしという事で制服にした。

「事故とかに巻き込まれてないといいんだけど…」

…ガガガガガガガガガガ

後ろの方から奇妙な音が聞こえてくる。

「クツロームウウー……！！」

「…！蒼！」

奇妙な音は蒼の乗って来たスケボアの音だった。

「ごめん！ちょっとオレの目覚ましのせいで…」

蒼は上手くスケボーを止め、クロームに言う。

「うつん…全然平気…」

「そっか…じゃ行こっか。」

そっ言いに黒曜ランドに向かい歩いて行く。

？黒曜ランド？

「六道骸。この子が前言った子だ。」

骸はまたソファに座っていた。違うのは周りに柿本千種、犬がいることだ。まだ他の連中は来ていないらしい。

「犬」

蒼が呼ぶ。犬は自分が呼ばれるのが意外だったのか驚いた顔をする。

「麦チヨコ」

言い、コンビニの袋を放る。

「うっひょー！やったびょん！」

「正直ドッグフードと迷ったんだけど。」

さてと。本題いきますか。

第23兩

オレ、目覚ましにいらつくー!! (後書き)

やった!一日に二つアップできた!!

第24兩

オレ、クロームの中継役になる？

「…クロームです。」

「霧沢蒼から話は聞きました。」

「よろしくお願いします。」

？
？
？

話をもたねー！ー！どーするよ、でもまあ初対面だしクロームもおとなしめの子だし当たり前だけどさ！

「…おい犬！なんとかしろ！」

「!?!?何しろってんだびょん!」

「~~~~~何かあんだろ!ほらこの前のゴリラとか!」

「無理だっつの!」

蒼が犬を捕まえコソコソ言う。あの戦いから少し仲良くなった二人である。

犬が考えた未取った行動は…

「ム…麦子ヨコ食べるびょん？」

つて麦子ヨコかよ！

「おい何で麦子ヨコ！？他に何かなかったのかよ！？」

「今手元にあつたのがこれだったんらし！」

「そらそーだわ！オレがさっきあげたんだもん！」

そんな事をギャーギャー言ってるよ…

「…ありがとう。」

クロームが麦チョコを数個袋から取る。ちなみに袋はさっきから犬がボリボリ食ってたから開封済だ。

その後少し雑談をした。

な…なんとかなった…か？

「じゃ、クローム。オレは帰るから。この人達には戦い方とか教えてもらうといい。イタリア語とかも。いやになったらいつでもオレん家来ていいからな。」

「なんらお前シスコンの兄ちゃんかっつての。」

犬につっこまれる。

「うっせ。心配なんだよ」

「蒼！」

クロームに呼ばれ、振り返る。

「……ありがとう！……がんばるね！」

「いえいえ。がんばれ。」

そう言い黒曜ランドを出る。腕時計を見ると……

11:46

「昼前か。帝もまだ学校か。よし。迎えに行こー」

スケボーを走らせる。

「……んー。今日はお見合いの中継の人の気分がわかった。」

？学校前？

「着ーいたつと。」

蒼がスケボーを降りる。

「随分と堂々と遅刻するね。」

うわっ。この声は…前を見ると案の定雲雀がいた。

「なんてタイミングが悪い時にいんだよアンタ」

「風紀を乱す奴は…噛み殺す」

「ハイハイ。どっかに勝手に噛みついてる。オレは迎えにきただけだから邪魔すんな。」

横をスルーし、門に乗って窓まで飛ぶ。

あー、この浮遊感が好きなんだよなー。とか思っているとすぐ窓枠の上。オレの場合しよっちゅう遅刻しそう（もしくはする）からいつもこの窓は昼まで開けといてもらってる。昼以降は多分来る気ない。

「帝ー。帰るぞー。」

担任はもういやという顔で苦笑い。陽気でいい先生なんだけどねー。

「『帰るぞー』ってなんで？」

帝もこんな事もう慣れてるといふ顔。

「まあまあ、あとで言うから。」

帝の手を掴むなり窓から飛び降りる。

「え、ちょ、待つ、うおー！」

問答無用と飛び出す。

「うおーい！手掴まれたままじゃ着地もできねーよ！」

「あ。そっか。わり。」

蒼が掴んでいた手を離す。

「え？ちよ、おわつ、だからっていきなり離すなよ！」

よほど慌ててるのか言ってる事が支離滅裂である。

「よっと」

「いっつっつっつ…」

蒼がまず着地し、その後帝が着地する。だが帝は少し失敗したらしく痛そうにしゃがんでる。

「だいじよぶか？」

「だいじよばない。」

「あそ」

「…ほつとくなら聞くなよ！」

「どーでもいけど目の前にこわーーーーーい顔した風紀委員長さんが立ってるから逃げねーと」
蒼が帝の方を向き、にっこり笑って言う。

「え？」

今まで下を見ていた帝が初めて上を向く。

「神野帝。霧沢蒼はインフルで休みだっと言ってなかったかい？」

「ひ、ひいひいーーーーー！に、逃げげるぞ！蒼！」

「あーいよ！呂律まわってないし」

「…噛み殺す…」

それを上から眺めていた山本達。

「ははっ。楽しそうなのな」

「そ、そうだね？」

「てめー何十代目に氣い使わせてんだよ！」

「ん？そうか？わり！」

決して席が近いわけではない3人が喋る。

「~~~~沢田！この問題解いてみる！」

「え—————！オレ！？」

そら先生も怒るわな。

「（もう少しの辛抱。そしたらあいつはいなくなる…）」
哀れな少女。間違いにはいつ気づく？

「んで何でいきなり？」

「ん？ああ、言ってなかったか？」

雲雀を撒いたあたりでスケボーを停める。

「イタリア行くぞ！」

「はぁ！？」

第24兩

オレ、クロームの中継役になる？（後書き）

コメよろしくです！

第25兩

オレ、INイタリア!!

「来たぜー……!!」

「イタリアー!!」

トランク片手に空港で叫ぶ蒼の横で帝はため息をつく。

何で二人がこんなところにいるかというと

さかのぼる事一日前…

「イタリア行くぞ！」

「はあ！？」

つかの間の沈黙。

「お前がそう言うってことはお遊びじゃなさそうだな。またなんかやらかしたのか？」

もう色々と帝には免疫ができているらしい。

蒼だって遊びにイタリアに行くわけではないのだが。まあ蒼にとっ
ては楽しめることだ。

「いんや、たいした事ない。」

「そっか…安心したー…またお前の事だから変な事に首つっこんで
んのかと…」
安堵の息をつく。

「骸と約束してきただけだ。」

…ん？雲行きが怪しくなってきたぞ…？

帝が笑ったまま固まり、首を傾げる。

「ワインディチエ復讐者の最高権力者になって牢獄に入んなくていいようにしてやるって」

ああ。オレの人生終わったかも。

帝は途方に暮れていた。

あの日なんでこの子は間違えて死んじゃったのかな…あのとき生きてたらオレもこんな目に遭わなかったのに…

「何でイタリア？イタリアにいるとは限らないだろ？」

オレっていつからこんなにあきらめるのが早くなったかな…

「フフフ…帝君？オレって結構パソコン系得意なんだよ？」

帝が初めにあげたメガネを上押し上げて蒼が得意げに言う。

「目撃情報多いとこ調べた」

「んでその結果一番多かったのがイタリアだったと。」

「その通り!」

「あ、でも黒曜編が始まって戦い見れなくなっちゃうぞ!？」

「ご心配なく、これから数日は骸の部下達と戦ってるから!」
ムダなあがきだったようだ。

そんなことでイタリアに来ています。

「えーと……こっちな……」

前では蒼が何やら地図を持って森を突き進んで行く。

「なあ。さっきから何をたよりに進んでるんだ？ どんどん森ん中に入ってくけど。」

「ん？ 目撃情報。なんかマフィアオタクみたいな人達がつけたりしてその情報がパソコンに載ってたりすんの。その情報が一番多いのがこの先なの。」

駄々こねっこの口調になってきてますよ蒼さん。

「でもさ、最高権力者になるってもどうするわけ？」

帝が聞くとめっちゃ、何言ってるの？という目で見られる。

そっついう目苦手なんよな…オレって結構ガラスのハートだから？

脳内でブツブツつぶやいてみる。

「弱み握るに決まってるんだろ。マフィアなんて一つは弱みあるさ」

「まずそんなに簡単に見つっ！？」

蒼がいきなりこっちに戻ってきて帝の口に手を押しあて、木の陰に座り込む。

こっついうのって男が下なんじゃないか？

今は蒼が無理矢理帝を座らせたので蒼の上に座ってる形になる。

不可抗力だから。これ。変な目で見ないですよ？

「おい、どうしたんだ？」

後ろに向かって小声で聞く。

「ワインディチエ
復讐者だ」

第25兩

オレ、INイタリア!! (後書き)

帝視点です!

…ていうか変な展開入れちゃってすいません!

お時間ある方はコメよろしくです!

第26兩

オレVS復讐者ボス！！

ついに現れたか。

ヴァイン
テイチェ
復讐者
：

帝が後ろから色々言ってきた時、どこからともなく現れたのだ。
第8の属性の炎ってやつか。

いつも通り3人いて、1人は何かすごい椅子に座っていて後2人はその人の下に跪いている。椅子があるということはしよっちゅうここに集まっているのだろう。

やっぱりボスの存在の人はいるらしい。んー。弱点見つかるといい

な

3人がバラバラに散っていく。

うし。つけるか。

つけるのは勿論ボスの奴。

下唇を舐め、ニヤツと笑う。

「おい帝。行くぞ。」

「えー！…本当に行くのかよ…お前でも復讐者には勝てねーよ」

「やってみなきゃわかんねーよ！」

その自信はどこからわいてくるんだとか後ろから聞こえてくるが無視無視。

どこに行くのつかない 流石に町をあの格好で歩くのは目立つだろう。どこかで変装を解くはず。

「!?!」

復讐者ボスの周りにボヤがかかってくる。

蒼は正直あの包帯や帽子を取るのを想像していたので驚く。

つてことはあの容姿も偽物つてことか!?!何か容姿がバレたら都合の悪い事でもあるのか?

帝もボヤに気づいたらしく驚いていたが、蒼は驚きが興奮に変わっていた。誰も見た事のない復讐者の素顔が見れるかもしれないのだ。

気配を消し、そのまま後をつける。

後少して村というところでボスの変装がとれる。

え…

うそ…

そこには蒼と同じくらいの子が立っていたのだ。金髪のボブの髪。黄色い目。赤のカチューシャ。膝上まである黒のワンピース。腰に巻いてある白のベルト。そして膝下までの黒のロングブーツ。彼女のまもっているものすべてが異彩なを放っていた。

蒼は立ち上がって気配を消すのをやめ、彼女に近づく。するとさすがに彼女もこちらに気づいたらしく振り返る。

「…誰ですか」

「交渉人？」

彼女は答えなんて求めていなかったらしく、いきなり攻撃を仕掛けてくる。

武器は大鉞^{おおまさかり}。斧が大きくなったような物である。この華奢な身体でこんな物が振り回せるなんて想像もできない。

目の前の少女はそれを軽々とやってのけるのだが。

少女が横から大鉞を振り下ろす。

「っおー！」

蒼が即座に上に飛び退く。帝はというと怖いと言い1キロ先から双眼鏡で様子をつかっている。

すると少女が大鉞を振り下ろした周りの木がパツクリ折れた。地面に木がずり落ち、地響きが響く。

「！！カマ風が起こせる程の風速ってことかよ」
背中に冷や汗をかきながら蒼が苦笑いする。数回少女が大鉞をふりおろすのをやり流し、彼女が疲れるのを待ってみたが伊達に復讐者をやっていた訳じゃないらしく、疲れる気配はない。

それじゃこつちから仕掛けねーとな。

目には目を。刃物には刃物を。

蒼はクナイを取り出す。

彼女が振り下ろした大鉞で起こったカマ風を蒼のクナイでつくったカマ風で跳ね返す。少女は倍になって返ってきたカマ風を想像していなかったらしく立ちすくみ、ギョツと目をつむる。

キンッ

少女が恐る恐る目を開けると目の前には蒼が立っていてクナイでまた斬撃を跳ね返していた。また倍になった斬撃は50m先の木まで切り倒していた。

「なん…なんで私を助けたんですか！私を殺しにきたんでしょ！」

「殺さねーよ」

彼女がキョトンとする。

「でも…」

蒼がため息をつく。

「交渉に来たって言ったじゃん。」

彼女はまた驚いた顔をし、少し安心したような顔をする。

「聞きましょう」

「復讐者の最高権力者にオレも入れてほしい」
普通に考えたらただの貪欲な奴だろう。だが回りくどいのは嫌いな

ので単刀直入に言う。断られたらどう言おうか考えてると少女が口を開く。

「少々時間をください」

そして考えているような顔をし、顔を上げる。

「いいでしょう」

「え。うそ」

今度は蒼が驚く番だった。

「なんで」

「あなたが誰かの為にこんな貪欲な交渉をしにきたのはわかっています」

少女がクスツと笑いながら言う。

「ですが条件があります。ひとつは私に必ず相談してから牢獄に連れて行ってください。あと必ず復讐者に格好で仕事を行う事。あと…」

「私をあなたの『友達』というものにしてくれませんか？
自信なさげに言う。」

「もちろん！」

蒼は満面の笑みで答えた。

「でもなんで友達に？」

場所を街のカフェに移し、蒼がコーヒーをすすする。今は帝も一緒だ。少女は悲しそうに微笑んだ。

「私の家系は今までこの復讐者を代々継いできました。私は強引ながら悪者を捕らえるこの職業を誇りに思っていました。今でも思っています。ですがやはり命を狙われるのです。友達と呼べる人などいませんでした。」

「ふーん。でも何でオレなんか？オレは別に大歓迎だけど」

「私は今まで命を狙われるばかりで命を助けられた事などなかったのです。こんな方と友達というものになれたらなと」

「なんか面接みたいだな」

「メンセツとは？」

「あ、面接知らない？そっか。ちっこい時から復讐者やってたんだもん。あー。応募者とかに直接会って試問する事を言うんだ。」

「ジャッポーネには様々な事があるのですね、いつか行ってみたいです！」

少女は空を仰ぎながらつぶやく。

それまで黙ってみていた帝が口を開く。

「…あのさ。疑問だらけなんだけど。なんでこんなところで復讐者のボスとお茶してんの？さっきまで戦ってなかった？」

「黙れ」

「いや、でもさ」

「黙れ」

「ひどい…」

しぶしぶ頼んだカフェオレを飲む。

「そつだ、名前は？」

「姫百合といます」

「あれ」

蒼が意外そうな顔をする。姫百合は不安そうな顔で首を傾げる。

「な…何か変な点でもあったのでしょうか？」

「あ、悪い。もっとこう、うんたら・かんたらみたいなのかと思っ
たからさ」

「確かにここイタリアだしな」

帝も会話に加わる。

「母が日本好きだったんです」

「なるほどね…母さんの願いは叶ったってか」

「はい？」

「何でもねーよ」

蒼はニヤツと笑いながらまたコーヒーをすすする。少女がまた申し訳
なさそうに言う。

「あの、名前を伺ってもよろしいでしょうか…？」

「ああ言ってなかったか？蒼だ。こいつが帝」

「ああ！いいお名前ですね！」

少女が満面の笑みで言う。

「サンキュ」

「あの…オレもわすれないで…」

「あ！帝さんのお名前も素敵です！」

その後他愛もない話をして別れる事になった。連絡用としてケータイをプレゼントして。デザインは蒼の色違いにしておいた。少女は本当に友達ができたんですね、とまた満面の笑みでケータイを抱きしめていた。蒼がいつでも連絡していいと言つとまた嬉しそうに大きく頷いた。

彼女は空港まで送りにきてくれ、恐らく飛行機が見えなくなるまで見送ってくれた。

姫百合…

花言葉

強いから美しい！

？成田空港？

「帝。」

「ん」

「オレらって何日イタリアにいた？」

「3日」

「まじ？」

「まじ」

「時計日本の時間に戻した？」

帝が頷く。ちなみに今はAM09:43。

「帝！黒曜ランドに行くぞ！」

「何でそんなに急ぐんだよ！」

「今日骸と沢田達が戦うんだよ！見に行くに決まってるだろ！」

「行くのかよー！」

結局いつでも振り回される帝だった。

二人が黒曜ランドに着いたとき、ちょうど沢田たちが戦っているところだった。その間に二人は骸の元へ急ぐ。

「六道骸」

骸はやはりソファに座っていた。

「おや、あなたですか」

「クロームはどうだ」

「戦い方も覚えるのが早い子ですよ」

「元気ならいい」

つかの間の沈黙。帝としてはとつとこんなところ抜け出したいのだが。

「…失敗しましたか」

「まさか」

ニヤツと笑って手のひらを前に差し出す。すると手のひらの上で第8属性の炎が燃え上がる。イタリアでわかったのだが幸い蒼は大体の属性を手に入れていたらしい。姫百合も第8属性の炎を出せる方はめずらしいのですが、と驚いていた。

「さすがですね」

「どーも。一番深いところに入れただけで一応牢獄には入れるからな。脱走しようとしたらその時はその時だ。1年我慢したら外に出れるしな」

「クフフ、かまいません」

ちなみに骸についてはもう姫百合に相談してある姫百合もそうとう

悩み、なんとか普通の牢獄に1年ということにしてくれた。

「そうだ。見物していてもいいか？もしかしたら手出すかもだけど」

「大歓迎ですよ。あなたの身体を憑依したらマフィア殲滅も効率よく進みそうだ」

「憑依できたら。けどな」

蒼は不敵な笑みを浮かべ、部屋の隅の椅子に座る。帝もそそくさと椅子に座る。

しばらくすると

沢田達がやってきた。

ちっちゅ...

どうなるかな？

第27兩

オレ、帰国！そして…（後書き）

少し遅れたかもです…

ただいまテスト返却中なのですが…もう返してもらわなくていいです…

コメ&感想よろしくです！

沢田達が映画館に入ってくる。あいにく浅野も一緒に来ていた。ちやっかり沢田の後ろに隠れて。青と帝は顔がバレたらめんどくさそうなのでパーカのフードを深くかぶる。

「（部屋の隅に座っている人達誰だろ…？）き、君は黒曜の人質の！」

「クフフフ…」

骸は何も言わずただ笑いながら4人を見つめている。

「違うよツナ君。あの人がホントの骸なの！」

沢田の後ろに隠れながら骸を指差して浅野が言う。

へー。どうやら少しは動くようになったらしい。

バタンッ

映画館の入り口のドアが閉まった。閉めたのはフウ太だ。

「脅かすなよ、フウ太」

「無事みたいね」

ピアノキがフウ太に近づく。

ドッ

フウ太が骸の剣でピアノキを刺す。

「え、おい、フウ太!？」

「マインドコントロールだな」
リボーンが言う。そこで沢田はマインドコントロールを解く方法を見つめる。おかげでフウ太のマインドコントロールは解けて骸も倒せたのだが…

「なんだろう…すぐく嫌な感じがする……」
へえ、少しは勘が効くようになってきたかな？

「ついに…骸を倒したのね」
ビアンキが起き上がる。

「アネキ！」

「よかった！ビアンキの意識が戻った！」

「無理すんなよ」

その場の雰囲気少し和む。

「肩貸してくれない…」

まだうまく立てないのか獄寺を見上げて言う。そんなビアンキに沢田は怪訝な表情。

気づくかな…？

「しよーがねーなー、今日だけだからな」
そう言い獄寺が屈み、手を差し出す。

「獄寺君？いつちゃだめだ！」
言った後、なんで自分はこんなこと言っただ？という顔をしている沢田。獄寺は沢田が自分のケガを心配しているのだと思い、平気だと言い、ピアノキに手を差し出す。

「すまないわね、隼人」

言っなり後ろ手に持っていた剣で獄寺を刺そうとする。

キンッ

目の前で金属音がした。恐る恐る目を開けるとビアンキの剣は弾かれていた。

蒼のクナイによって。

「あらら。見物だけのつもりだったのに」
フードを深くかぶっているため、沢田たちには蒼が誰だかわかんないだろう。まあわかんなくていいんだけど。

蒼は部屋の隅に座っていて、そこからクナイを投げたのだ。

青が席を立ち、ビアンキ達のいる方へ歩き出す。

「正直あんたらが戦っていきようが死のうが生きようがどうでもいいんだけど。その男には死なれると嫌だからね」

しばらくして沢田が我に返ってビアンキの方を見る。

「び、ビアンキ！なにやってんだよ？」

「そいつはビアンキなんかじゃねーよ」
蒼が自分の投げたクナイを拾って言う。

「そいつはナツポー野郎だ」

「クフフフ、僕にはまだやるべきことがあるのでね」

「んなことどーでもいいんだって。暴れたいと血が騒ぐだけだ」

「あなたとは戦うかいがそうだ」

「そらどーも」

ビアンキから10mくらい離れた所で止まる。

「てめー何者だ」
リボーンが口を出す。まあ何者だかわかない奴が出てきたら聞くだらう。

「んー。あんたの知ってる奴？」
わざと冗談っぽく言うてみる。

ズガンッ

「おわっ」
いきなり撃ってきたのであわてて方の方へ飛び退く。だがその時の風でフードが取れてしまった。

「いきなり撃つことねーじゃんよー。フード取れたし」
蒼だとわかり騒然とする人達。

「な、なんで霧沢さんがここにー？」
沢田はいつも通りのオーバーリアクション。

「うるさい」

一言であしらいリボーンの方を向く。

「おわかり？」

リボーンは無言で頷いたので骸の方へ向かう

「（なんであいつがここにいるの？…あ。この機会を使ってあいつを悪者にしてやるーっ）」
蒼は浅野が何か企んでいるのは感じていたが放っておくことにした。

「始めようぜ。」

「いいでしょう。地獄道！」

パキッバキバキバキッ

骸が剣の柄の部分の部分を床につけると床が崩壊し始める。

「おー。幻覚か。やるなー オレも術師になりてーなー」

そんなことを言いながら床の破片の上を飛び回る。

「余裕こいてる暇などありませんよ！」

飛び回ってる蒼を骸が剣で突き刺した。

「！カハッ」

蒼の口から血が流れる。

第29兩

オレ、骸と決着をつける！

「カハッ」

蒼の口から血が流れる。

「呆気ないものですね」
骸が笑い、蒼から背を向ける。

「あんだ誰に背エ向けてんの？」
声だけでも笑っている事がわかる。蒼の声だ。骸が驚いた表情で振り返る。だがそこには倒れた蒼の姿があり、先ほどから動いた形跡はない。

「キヤハハハハ！何処見てんだよ！」
幼い子供がいたずらを成功させたような声。

すると倒れている蒼にモヤがかかったかと思えばサッと消えてしまったのだ。

「なっ！？」
骸が驚愕した顔をする。

「そんな…幻覚！？そんな気配はしなかった！」
「それはオレも同感だぞ」
リボーンが口を挟む。

「え！？どーいうことー！？霧沢さんも術師だったのー！？」
「幻覚の気配はねーって言ったるバカツナ」
「ボヘブツ」
リボーンが沢田に蹴りを入れる。すると骸の座っていたソファに蒼が足を組んで座っていた。

「蜃気楼」
「え？」

反射で沢田が返事をする。

「塵気楼だ。大気の下層に温度差などの密度差がある時に起こる以上屈折だ。オレだつて幻術使える物なら使つてみてーよ」
「そう言い肩をすくめる。」

「それより六道骸。そろそろ自分の身体に戻つた方がいいんじゃないか？息が切れてきているぞ」

「！クハハハハ！あなたはどうかやら自分の死期を早めたいらしいですね」

「そう言い、ビアンキの身体が倒れる。骸の精神が抜けたらしい。そして次の瞬間には骸が立ち上がる。」

「ビアンキー！」

沢田がビアンキに近寄り、支える。

「こんなにポロポロになるまで…よくも！」

「リボーンの背負っているスライムみたいなもの（後で聞いたならレオンというらしい）がブルブル震えだす。」

「骸…お前にだけは…」

「絶対負けない！！」

スライムがカッと光る。次の瞬間放射状に何かが放たれる。蒼の身

体にもペタペタ張り付く。

気持ち悪っ。クナイでそれらを切る。驚いたのは蒼だけじゃないらしく、骸やツナも驚いている。アルコバレーノの説明によるとこれはレオンの羽化らしい。リボーンの教え子が成長するとその生徒専用の道具を吐き出すらしい。

なんと気持ち悪い…。蒼は内心青ざめながらそれを見ている。そして吐き出された道具は…

「ええー！ー！？毛糸の手袋！？」

『27』と書かれている手袋だった。だがそれにはオマケがついていて、中には特殊弾が…！

「見た事ねー弾だな。ぶつつけて試してみつか」
アルコバレーノがイキイキと言う。

ズガン

なんとか命中した特殊弾。それは小言弾だった。仲間の小言を聞いた沢田。

「骸：お前を倒さなければ…死んでも死にきれねえ！！！」

小言弾は内側から効果を發揮するものだった。

「クフフ…少々厄介ですね…それでは僕も最終手段を使いましょうか」

そう言い、骸が自分の右目に指をつっこむ。

「できればこのスキルは使いたくなかったのですが」

グジュ…グジュ、グリ…

骸の目から血が滴り落ちる。

「もっとも危険で醜いスキル…人間道」

骸の目が『五』に変わる。他に変わったのは骸のまとうオーラだ。どす黒いオーラだ。

「クフフ…このオーラが見えますか？このオーラの大きさこそが…」

骸が剣を持って沢田に突っ込む。

「強さ!!」

沢田はグローブでそれを防ぐ。

「くっ」

沢田が勢いに押され、後ろに吹っ飛ぶ。

「んー。オレも暴りたいなー。アルコバレーノ。」
「なんだ」

「骸吹っ飛ばしていい？」

「お前はオレが止めたら止まってくれぬ奴だったか？」

「よくわかってんじゃん 悪いね」

蒼はそう言い骸に近づく。

「失礼」

カツ

カツ

カツ

カツ

蒼が骸の横を通り過ぎる。

「睡蓮すいれん咲きさき!!!」

ブシヤッ

骸の背から大量の血が噴き出す。20余りのクナイが骸の背に静かに刺さる。

「はい終了。今度は別のお仕事だな。沢田はあそこでのびてるしいよな。」

言うなり蒼は第8属性の炎を使って復讐者の格好になる。

「!!!?おい蒼!どういうことだ!?!」

リボーンが思わず声を上げる。

「…アア、アルコバレーノ。イタノカ。ホカノヤツラニハダマツテ
ロヨヨ?」

もう一応復讐者の格好なので片言で話す。

「六道骸、城島犬、柿本千種。キサマラハ、マフィアカイノオキテ
ヲヤブツタ。ヨツテトウゴクスル。」

三人の首に首輪をつけ、連れて行く。そこでようやく気を失っていた
沢田が目を覚ました。

「ああ!ちょっと待って!何処に連れてくの!?!」

「ツナ!あいつらには逆らうな。お前まで危ないぞ」
沢田が静かになる。

それを確認してから蒼は黒曜ランドを出、変装を解く。

「あー：今日は結構疲れたかも」
そう言い家に帰って行く。

その頃沢田は…全身筋肉痛に苦しんでいた。

そして帝は…置いて行かれた！と嘆いていた。

健気な神に幸あれ！！

第29兩

オレ、骸と決着をつける！（後書き）

こんにちわー

ここまで読んでくださりありがとうございます！

蒼：本当に。無理して読んでくれてんだぞ。

まいったあなたですか！いいじゃねーっすか！コメントくれる人いるもん！！それにね、その話の主人公はあなたですよーだ！へへん！

蒼：…オレ主人公辞めよっかな…

え、ちょ、ま、すみません！主人公辞めないで！！

蒼：冗談。

蒼さんんんん！！！！（泣）

ともかく読んでくださりありがとうございます！

（本文のナミの真似っばいのは許してください！！）

第30兩

オレ、久々のガッコ!

「えー。ついに来週からは期末テストだな!みんな勉強に励むように!」

寝起きの蒼の耳に届いたのはそんな言葉だった。

「おいちよつと待て!!」

いきなり立った蒼にクラス全員が驚き、振り返る。

だがそんな事おかまいなしだ。

「テストとかあんのかよ!?!」

「あるにきまつてるだろう。霧沢も寝てばっかないで勉強する!」
「た!」

クラスのみんながどつと笑う。

「おい蒼、ここは学校だ。テストくらいあるに決まってるんだろ」
後ろの方から帝に言われる。

いーなー後ろの席!。あ、そだ!

「センサー!オレ席替えしたらやる気出る!」

「本当か？」

「ああ！」

「寝ないか？」

「保証はできねえ！」

「：堂々と言う事じゃないはずなんだが：いいだろう。可能性があるんだったらな。席替えをするぞ！」
クラスが沸き立つ。

「せんせー！お見合い式がいい！」

誰かが言う。すると他の人達も賛成する。どうやら小学校の時によくやっていたらしく、懐かしいからという理由らしい。女子が先に自分の席を決め、その間男子は教室の外に出ている。そして男子も同じようにして決める。そして全員教室に入り、自分の決めた席に行くのだ。

女子が先という事で、席を決めようとすると

「先生！男子の方が一人少ないので、霧沢さんは男子の方に混ぜてもらったらどうでしょう！」
元気そうな女の子が手を上げて言う。

「ああ…確かに一人少ないな…」

先生が指で生徒の数を数えながら言う。

「悪いが霧沢は男子の方に混じってくれるか？」

「全然。男子側だったら窓側行けるし。」

そう言い教室を出る。女子が決まったようなので蒼も中に入る。そして窓側に座る。

「あっ、霧沢さんだー！お隣よろしくです！」

元気よくなり座ってくる少女。さつき蒼を男に混ぜたらどうかと提案した子だ。

「霧沢さんはこの席を選ぶと思ったんですね、予想的中です！他の女の子達に聞かれて大変だったんですよ。」香乃加の予想はあたるから霧沢さんの席どこか予測してー！』って。「隣に座ってきた少女は藤^{ふじかの}香乃加というらしい。」

「霧沢さんはモテるし大…」

香乃加が『大変ですね』と続けようとしたが突然のドアの開く音の遮られる。そしてその立っていたのは

右手にギプスをつけた浅野望だった。

「望ちゃん!？」

沢田達が驚いて駆け寄る。

んー。いやな予感がするなー。

「どうしたのこの腕！」

沢田が聞く。浅野が俯きながらつぶやく。

「霧沢さんが…」

「…え？」

「ツナ君が黒曜ランドで気を失っていたときに呼び出されて…階段から突き落とされたの…」

クラスの視線が一斉に蒼に集まる。ただ一人香乃加だけがどうでもよさそうに無表情で頬杖をつきながら前を見ていた。

いやな予感ってのはこれか…。

「霧沢さん…うそだよな？」

沢田が不安そうに聞く。蒼がため息をついてクナイを取り出す。

シュッ

浅野の右腕に向かって投げる。

「キャッ！」

とっさの事に浅野が避ける。

右腕を上には振り上げて。

クラスが今度は浅野の方を見て驚いた顔をする。

「悪いな。お遊びに付き合ってたってもよかったんだがめんどうくさいもんで」

「ど…どういこと!?!?」

沢田が蒼と浅野を交互に見てあたふたしている。

察しろよ。

蒼は少しいらついて沢田を睨む。すると段々クラスがざわついてきた。

「え?」

「どづいづこと?浅野さんの自作自演?」

「うそ…」

「望ちゃんが霧沢さんを陥れようとしたって事?」

「まさか…」

クラスは肯定も否定も仕様のない事をコソコソ言い合ってる。そのうち浅野がいたたまれなくなり、教室を飛び出す。慌てて沢田も追いかけようとするが蒼が止める。

「何で止めるんだ!？」

「あんたがあいつを追いかけてようとするのもわからなくはない。でも今あいつは追いかけてほしくないはずだ。」

蒼の言葉を聞き、沢田は渋々新しい席に着いた。

なんで！？なんでこうも上手くいかないの！？

浅野は廊下を全速力で走りながら考えていた。

あたしはこの世界で『主役』なの！だから『主役』のやることは全て上手くいくはずなのに！でも今考えなくちゃいけないのはそんなことじゃない。

これからどうしよう？

教室に戻って謝る？

だめ。責められていじめられるに決まってる。

前の世界に戻っちゃおう？

だめ！せっかくリボーンの世界に来たのに！いつか戻されるとしてもいれる限りこっちの世界にいる！

じゃあ私はどこに行けば良いの？私の行き場は何処にもないの？

どこかリボーンの世界で私が知っていて、私の事を知らない人がいるところ…

あ。

イタリアー！！

私の居場所はヴァリアーなのかもしれない！

浅野は学校を飛び出し、荷物をまとめて飛び立った。

自分の考えが間違ってる事に気づかずに。

第30兩

オレ、久々のガッコ！（後書き）

こんにちはー。

あの、これを書いているとき、週間閲覧回数が700越えしたんです！
パチパチパチー！

蒼：今見てる読者サンの時は100未満かもな。

…もうスルーしよう。うん。ワタシ心強いからー！！（泣）

時間のある方は感想orコメよろしくです！

第31兩

オレ、健気(?)なフオー！

…おい浅野…

てめーのせいで教室微妙な空気になっちまったじゃねーか!!

いや、ある意味オレのせい？オレがあんとき本当の事ばらさなきゃよかったのか？

どーするよー…

蒼が帝に目で助けを求める。だが帝は知らんぷりだ。

くくく!!…こっぴなったら…

「あーあ。失敗か…」
蒼が立ち上がり、クナイの刺さった壁へ向かう。そしてクナイを壁から取る。

キュボンッ

吸盤のような音がしてとれる。

「「「??」」」

クラス全員が頭に『?』マークを浮かべていた。

「浅野に的あての練習付き合ってもらっててケガ人のフリしてもらってたんだ。やっぱオレもまだまだだな」

クラスは何がなんだかわからなくなっていたがごまかしにはなつたらしい。

「なんだー。霧沢さんのいたずらかぁ」

「びつくりした!」

そう言いみんな改めて自分の席に着く。

「霧沢さんって優しいんですね。あれ本当は霧沢さんのいたずらじゃないんでしょう?霧沢さんそんなめんどくさい事しませんもん」

「いえいえ。あ、でも私的には情報通として気になる対象ではありませんけどー」

「香乃加の知らない情報なんてないもんねー」

「そんなことありませんよー？」

いや。オレはあんたなら何の情報でも集められる気がする。

そんなこんなで放課後???

「おい蒼！」

ふいに呼び止められる。振り返ると隼人が立っていた。

なんたる。今日は何もやってないぞ。前借りた金は返したし、みたらし団子買わせた時もこの前みたらし団子返したし。

あ。あだ名の？60寺じゃなくて50寺の方がよかった？いやいやそれは“隼人”で落ち着いたはず。

「あのさ、」

「さあ何が来る！？バッチ来ーい！！」

「十代目の勉強一緒に見てくれ！！」

「あ？」

なんじゃそら。

そんなこんなで沢田家???

さかのぼる事十分前の教室…

「なんでオレが沢田の勉強教えなきゃいけないんだ？」

恐らくオレのこの時の目は死んでいた。

「多分お前の方がオレとか野球馬鹿よりも教えるのが上手いかなって思っただけで、べ、別にいやだったらいーけどよ！」
「言い方が変だったが強要はしないということだろう。」

「じゃ行かない」

「……」

でもやっぱりそう簡単に引き下がりがりたくもないらしく。

「みたらし3本！」

「は？」

「一日みたらし3本でどうだ!？」

その瞬間蒼の目がみるみる生き返る。

「喜んで行かせていただきます!!」

まあつまり食いもんで釣られたってこっちな。

新しいことわざ

『蒼にみたらし』

意味

大好物であること。また、効果てきめんであること。

(猫にマタタビ)

第31兩

オレ、健気(?)なフオー！(後書き)

こんにちは！ちょい短めです！

いや、私もテストには頭を悩ませました…

蒼、食いものに釣られる気持ちはわかるよ！わたしも仲間だ！

蒼：一緒にすんな！！

……コメとか時間あつたらよろです…

第32兩

オレ、マキさんを手伝う!?

「おい!何でこの途中式の計算がこんなになってんだ!？」

「ひい!すんません!」

オレは今沢田の家にいる。そして思い知る事になる。

漫画通り…いや、それ以上に

沢田は馬鹿だ！天然記念物級の！

そんな二人を山本は笑いながら、獄寺は少し心配そうに、リボーンはにやにやしながら見ていた。

「リボーン！見てるなら助けてよ！」

「あ？誰から助けてほしいって？そんな事より次は歴史だ！」

「もうやだー！あれ本当に名前がめんどくさーい！これとか足利何人いるんだよー！ー！ー！ー！ー！！！」

沢田の悲痛な叫びは夕方の並盛町に響き渡った。

沢田の家からの帰り道???

蒼は獄寺と一緒に歩いてきた。みたらしを食いながら。

「なあ。沢田はいつもあんなに馬鹿なのか？
容赦なく聞いてみる。」

「なっ、十代目は馬鹿なんじゃなく他の奴らよりも知能が劣ってら
っしゃるだけだ！」

隼人…それフォローのつもりかもしんねーけど…

「要するに馬鹿って言ってんじゃねーか」

「…あ！『馬鹿と鉄は使いよう』って言うしよー！」

「もう馬鹿って認めてんじゃねーか」

隼人も何も言う事ができず黙ってしまっ。

うん。アンタは十分頑張ったと思う。

「はははっ！オレもそんな感じだな！」
いやアンタは『やればできる子』って証明されちゃってるから。

「でもやっぱこっち（日本）の問題って簡単だよな」
いやアンタは単に頭良いだけだから。それにそれ言ったら沢田の立場はどうなる。

「そっぴや蒼。明日空いてるか？」
山本がふいに聞く。

「いや、空いてっけど。なんで？」

「明日ツナとかと一緒に買い物に行く予定なんだけど蒼も一緒にどうかと思っとな」

明日…明日は確か…あ！

あの白髪ロンゲがくる日だ！

「行く！」

こうしてオレの買い物同行が決まった。

「悪い。隼人。オレマキさんの店行ってくっから」

そう言いUターン。

「ギブ」

次の日オレは昨日の約束通り買い物に来ていた。

でもちつとばかり忘れていた事があつたんだ。

沢田がガキ連れだということ。

いやあのな、これ結構重要。オレの場合性格上ガキンチョまじもつ無理な訳。身体が拒否反応起こしてるっていうか。

「あおー！おれっちあのあめ玉たべたいんだもんね！かってこい
」！
」

牛ガキがそう言いながら足に飛びついてくる。

ほおーら。もうダメこういうの。自分でも引き笑いになってるのがわかる！。

イーピンは好きなんだけどな。チャーハンうまいし。よく団子作ってくれる。

「お、おう。わりいな」

獄寺も引き笑いで返してくる。たしかこいつらも犬猿の仲なんだから。

まだロンゲが出てくるまで時間あるらしいしマキさんのとこで暇つぶししよー。

チリンチリーン

「いらっしやいま…って蒼ちゃんか」

「何そのいかにもがっかりな顔」

マキさんはレジに立っていた。

「んー。お客かと思って」

「えーオレお客じゃないのー」

「蒼ちゃんはお客よりもお友達よー」

マキさんが頬杖をついて言う。大人びた顔のマキさんがこんな事満面の笑みで言ったら大半の男は墮ちるんだろーな。そんなのんきな事を考えながらマキさんの方へ近づく。

「そらありがたいお言葉。もったいないくらい。今日さあなんかもうやることなくて暇でさ…困ってんの。だからフラフラマキさんのとこ来ちゃった」

ニカツと笑って言う。

「笑ってもだめよ。ここはいつからハローワークになったのかしら？」

冗談めかしてマキが言う。

「んー。そだね…蒼ちゃん庄屋さん…やってみない？」

「いっしょじゃいませー」

10分後???

店は客であふれ返っていた。

『蒼ちゃんはこれとこれとこれに来て、この看板もってちよつと宣伝してくれたらいいから!』

そう言つて渡された服は、灰色の半袖パーカに白の長袖。したは黒の七部丈のズボンに銀のチェーンを着けて仕上げにマイケル的な帽子である。

『マキさん、この帽子だとオレポニーテールだから入んないんだだけ』

『横で結べば問題ないわ』

そう言い手際よく蒼の髪を結び直す。

『うし!んじゃ蒼ちゃん5分後に店の外に出てね!』

『なんで5分後?』

『女の子達の服を用意しないと! (蒼ちゃん恐らくモテモテだからね)』

『???了解』

そんなこんなで5分後???

店の外に出て看板を立てて立っていたら

「あの、この店の店員の方ですか?」

めっちゃ女の子のオーラをまとった子達が蒼に寄ってきた。

「ええ、まあ」

「わー！ねえねえ入ってみよー！」

「そうだね！おにいさん選んでくれませんか？」

うんだよね。オレやっぱズボンはいてたら男に見えるよね。もう褒め言葉にすら聞こえてくるよ。

「すみません。オレはここで宣伝してなくちゃいけないんで。買ったらは非着て見せてください」

思いつきり愛想笑いで対応する。地で対応して逃げられたらマキさんに申し訳立たないしな。

この時放った蒼の言葉で売り上げがとてつもなく上がった事は言うまでもない。

第32兩

オレ、マキさんを手伝う!? (後書き)

やったー！ー！ー！ー！

今日から冬休みー！

投稿もがんばりますー！！

…寒いっ。寝よう。湯たんぽは神だと霧宮は思います。

第33兩

ロンゲ来る！！

あー。なんかもう…疲れた。

蒼はやはりまだ店の呼び込みをしていたのだが蒼の発言のせいで店の蒼の前に行列ができてしまった。みんなかった服を着て蒼に見せにくるのだ。買ってくれるのはありがたいが正直うんざりだ。初めに言った人だけでなく他のお客も並んでいるからだ。

みなさんオレなんかに見せても何にもなりませんよー。

もう目が死んできたかも、というとき

ドゴオオオン

店から少し離れたところで爆発音と舞い上がった煙が見えた。

死んだ目が生き返る。

「来たああああああああ！！」

そう言うなり蒼はマキさんの店に入る。

「マキさん悪い！用事できた！」

「いいわよもう十分働いてもらったし。その服はアルバイト代であげるわ！」
ヒラヒラ手を振りながら言ってくれる。店を出て行ったとき女達がなんか悲鳴に近い声を発していたがおかまいなしだ。オレはこの為に今日来たんだし？

走ってその現場にたどり着く。

あら？もう沢田は着いてるはずなのに。

そこに沢田の姿はなかった。そこにいたのは額に炎をともした少年とロンゲ野郎。蒼としてはいない方が好都合なのだ。

どうやら少年の方が危ないらしい。

ちゅっちゅ。

参戦

「白髪ロンゲーーーーー!!」

ロンゲに向かって思いっきり叫ぶ。さすがにまずかったか? いやでも事実を述べたまで!

「あああ!?!これは白髪しりあげじゃなく白髪はくはつだああ!?!」

は!?!何言ってるんだこいつ。

「気にすんな!漢字にしたらかわんねーよ!」

「随分違つぞおおお!」

ほんと何にいつ。気にするところがおかしくね？

「じゃあおっきのセリフ白髪はくはつってことではー！」

「思おもいつきり白髪はくはつってただぞおおおー！」

ってオレはこんなこと話したくてきたんじゃないー！！

「ケンカしようぜ」

「死んでも知らねえぞおお！」

返事はOK。

「楽しい時間の始まりだ」

言ったと共にロンゲが攻撃を仕掛けてくる。

左手の剣を右上から振り下ろす。蒼はそれを避けて上に飛ぶ。ロンゲは逃げる隙を与えず次々に攻撃してくる。だが蒼も逃げているだ

けのはずがない。

「お兄さん名前は？ずっとロンゲはやだろ？」

「S・スクアーロだああ！」

「白髪、足下ちゃんと見ろよ。」

「直ってねえじゃねえかああ！！！」

突っ込みながらも下を見る。そこにはビー玉大の黒い玉がたくさん転がっていた。

「！こりゃあ…！やべえ！」

スクアーロが慌てて上に飛ばうとする。

「BOOOM」

ドガドガドガドガドガーン

立て続けに玉が爆発する。

「アハハハハ！結構使える！昨日花火の火薬集めて作ったかいがあった！」

建物の上から眺めていた蒼が子供のように笑う。だがこのくらいで倒れるような奴じゃない。

「起きなよロンゲ」

「ガキが…なめてんじゃねーぞおおおお！！！！」

スクアーロが剣を振る。

J
a
c
k

T
h
e

R
i
p
p
l
e

クナイを構えた蒼。

ザシュッ

「！ガッ…ハ…」

蒼がスクアーロを通り過ぎた瞬間

蒼のクナイがスクアーロを切り裂いた。

「あなたはこの偽物を持って帰んなさい」

倒れてる少年からリングの箱を取ってスクアーロの懐に入れる。原作ではたしか少年が持っていたのは偽物だった。原

「ていうか何で沢田達来なかったんだろ…まあやりやすかったしいつか…」

その日の空はやけに青かった。

第33兩 ロンゲ来る！！（後書き）

感想&コメよろしくです！

スクアー！好きな人すいません！！

第34兩

ハーフボンゴレリング来る！

「…オレ出番なしかよ…てかお前この前の！」

ぶっ倒れてるスクアーロと蒼を交互に見て驚いてるのは

跳ね馬

デイナーだ。

そっか。原作ではデイナーがスクアーロと沢田のケンカを止めるんだっけ。出番奪っちゃった。ていうかさすがに名乗らないとヤバいかな。前回会った時は結局名乗らなかった。名乗んの忘れてたし。

「お、お前がスクアーロのやつを倒したってのか？」

「ああ。」

「お前が」

「ああ」

「お前何もんだ？」

「ああ」

「ずっと『ああ』しか言ってるじゃねーか…」

「ああ。ああ、そっか。名乗る必要なくね？」

「いやでもこの前の事と言いつつ今回の事と言いたただ者じゃねーだろそんな事を言ってるでいいよ。」

「そいつは霧沢蒼だぞ」

ビルの向こうから誰か出てくる。

沢田ご一行だ。

「オレも気になってる対象だ。ファミリーに入れる予定だぞ」

「だからボスにはなんないって！」

沢田が横で嘆く。そこで蒼はそこそこ重大な事を思い出す。

確か隼人と武はここでスクアーロに負けてやる気が出るんじゃないかなか
ったか？

…オレが勝っちゃったからやる気出なくなか？

ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！このまんまなしになっちゃったら戦闘シーン見れないじゃん！何か策を考えねーと…

蒼が色々考えてると

「こいつ蒼が倒したのか？すげーのな！」
武がスクアーロを指して言う。

あー！どうやってごまかそう！？

「それについては後で話すからとりあえず今はその倒れてるやつ病院連れてった方がいいんじゃないか！？」

よし、これはいい！オレグッジョブ！

「そうだな。おいディーノ。そいつ連れてこい」
リボーンがディーノに言う。

なんとか逃れられたようだ。

その後病院に来たのは蒼、リボーン、ディーノ、ツナの四人だ。病院では既にディーノの部下のロマーリオが準備をして待っていた。処置が終わると少年について話し合われる。

「リボーン、この子誰なんだよ？」

沢田が問う。だが質問に答えたのはディーノだった。

「今は何とも言えねーな。一つ言えんのはこいつがお前の味方だつて事だ、ツナ」

「オレ敵とか味方とかないんですけどー！！」

「うっさい。ここ病院」

蒼がいかにもウザっぱそくにツナを見る。

「そもも言つてらんねーぞ。ツナ」
リボーンが意味ありげに言う。

「え？どういうこと？」

「こいつ、バジルが持ってきたリングは“ハーフボンゴレリング”
といってこのリングの為にどれだけの血が流れたかわからないとい
う代物のリングだ」

「ひいひい！！ろ、ロンゲの人が持つてつてくれてよかったよ、
そんなリング！」

沢田がおびえたような声を出す。オレは訳ありの方が面白そうだと
思うけど、普通の人にとっては普通の反応だろう。

「そ、それがなツナ。実はそのリング

本物ここにあるんだ。」

「！！」

「えー！！？！」

このことはリボンも知らなかったらしく若干からだが震えた。

「な、なんで」

「そりゃーツナ、お前がボンゴレの」

「でい、ディーノさん！おれしゅ、宿題あるんだっ！！」

それじゃ！といって病室を飛び出るツナ。

今逃げても何にもなんないのにアホか。

「跳ね馬」

「なんだ？」

蒼がディーノの方を向く。

「あのロンゲ倒したのオレじゃなくてお前ってことにしておいてくんね？」

「何でそんなことにする必要がある？」

これはリボンだ。まあそうだろ。みすみす手柄を手放すなんて。

「オレがボロ負けしたってことにした方があいつらやる気出んだろ。」

そう言っつて蒼も病室を出る。

「あいつは何処まで知ってたんだ？」

ディーノに聞く。

「よくわかんねーんだ。ボンゴレの情報網でもなんにも出てこねーんだ。」

「！？それはねーだろ。ボンゴレだぞ？」

「それがあり得たからオレも驚いてんだ。まああいつも守護者に入れる予定だけだな。」

「待てよ、リングは大空、雨、雲、晴、霧、雷、嵐の7つ。あいつらだけで全部だぞ?」

ディーノは理解不能のようでリボーンに聞く。

リボーンがニヤツと笑う。

「今回は異例だ。V E I E I世の時だけ存在したという

時に現れ時に消え、
全てを巻き込む竜巻

『風のリング』だ。」

第34兩

ハーフボンゴレリング来る！（後書き）

コメよろしくです！

誤字脱字とかも…あったら教えてください！

第35兩

オレ、守護者になる！

次の日???

学校につく。今日は気分的に早く来て学校で寝ていたかった。期待通り一番乗りだった。

生徒の中では。

「ちやおっす」

「なんであんたがいるんだ？アルコバレーノ、リボーン」

「オレがいたいからいるんだ」

相変わらずのポーカーフェイスで答える。答えになっていない気がするが。

「本当のことを言ったらどうだ」

ため息まじりに聞く。聞いてやるとよくぞ聞いてくれたとばかりにニヤツと笑ってみせた。正直たれ眉だからいつでも笑ってるように見えなくもないのだが。とにかく笑った。

「ツナの守護者になれ」

「最早拒否権なしか？」

「ああ」

またまた蒼はため息をつくはめになる。こっちにきてから絶対ため息増えた。

「浅野に頼んだらどうだ。あいつなら泣いて喜んでやってくれるぞ。」

「あいつがどこに行ったかわかってんだろ。それにお前の方が強そうだ」

「それはどうだか」

「少なくともオレよりは強いだろ」

「過大評価だ。どっちにしる答えはNOだ。めんどくさい」
「そう言い突っ伏して眠りに入ろうとする。」

「みたらし10年分」
リボーンがつぶやく。

「20年」

「25年」

「いいだろう」
蒼が顔を上げる。

「あくまで守護者としてだ。守る時は守る。だがそれ以外の時は馴れ合っつもりはない。」

「かまわねーぞ。ちやお！」
リボーンが窓から飛び降りる。

「みたらし25年分？」
授業までいい夢が見れそうだ。

「うそ」

「なにが」

「もう昼？」

「とつくに」

「オレ今日はちゃんと授業受ける来あったのに……。何で起こしてくんなかったんだよ!？」

「気持ち良さげに寝てたしいつも起こしてもすぐ寝ちまうし。」

「そこは起こせよ!。まいいや。起こってしまった事はしょうがない!飯行くぞ!」

いきなり立ち上がり、ドアの方へズカズカ歩いていく。

「ちよつと待てよー!」

やっぱり帝は一生苦労する運命なのかもしれない。

蒼は帝より一足早く屋上に着き、ドアを開ける。獄寺と山本が座っていた。この組み合わせはない。もう気まずすぎてヤバイ。オレ一人じゃこの空間にはいれない！帝早く来いー！

「蒼！せっかく呼びにいったのに先に行くとかありえないんだけど！」
帝がドアを開けて大げさに叫ぶ。

助かったああ

「それでなんでオレの事呼んだんだ？」
二人の方に向き直って言う。

「あれ、結局オレ無視？」

帝、哀れなり！

「ああ。蒼ならこの指輪の事何かしら知ってんじゃねーかって
獄寺がそう言い指輪を突き出す。山本もどつやら同じらしい。」

「あー。それねー。オレが今言えんのは隼人のそれが『嵐のリング』
で武のそれが『雨のリング』ってことくらい」
山本と獄寺が各々のリングをまじまじと見る。

「確かに…少し違うのな」

「オレのには竜巻みたいなのが描いてあるぜ。蒼のは何が描いてあ
るんだ？」

「ん？オレのか？」

蒼がリングを突き出す。そこには風が横から吹いているような絵が
あった。

「オレのは風のリングだ」

「そういえばこの前のあのロンゲは蒼が倒したのか？」
獄寺が聞く。

「いや。オレはあいつに負けたんだ。そこに跳ね馬が来て助かった
んだ」

「こつ言わなきゃ戦闘シーンが！」

「でもあのとき…蒼無傷じゃなかったか？」

しまったー！オレ無傷なんだった！そつだよね本当は勝ったんだもん！どつしよう

「じ、実は帝は黒魔術師でオレの傷を一発で直したんだ！」

チーーーーーーーーーーーーーーーーン

「「「（もつとマシな嘘あんだろー！！）「「「

しかし心の優しい2人はこのあきらかに嘘の話を信じてあげました

第35兩

オレ、守護者になる！（後書き）

これから実家へ帰るので更新遅れます！すみません！

誤字脱字あったら教えてください。

第36雨

オレ、暴れかける!?

数日後

夜。

「帝ー。出かけっぞー。」

スヤスヤ気持ち良さそうに寝ている帝を起こす。

「何でだよ…もう少し寝る………」

完全に寝ぼけていると見た。そうとなったら…

「おんどりゃああああ!?!?!?!」

「ぼへぶー!」

ドスーン…

下の階の人すんません。

帝のベッドに乗り、布団をひっぺがえして帝を蹴り落としたのだ。

「だから何だよ！もう少し寝るって言ってるんだろ！？」

おおー、効果てきめん。

「出かけるぞ！」

「どこに」

「今日はヴァリアーの奴らが集まる日だ！」

その場所に行ってみるともうだいたいの人がいた。
あー。来んの遅かったかー。家光が来ているいる説明が終わった所らしい。

「あそこの木。登るぞ。」

「またかよ。木登り苦手なんだけど…」

「オレは木登り大好き」

一応気配を消して上から眺めてる。出ていくのも面倒なので全ての説明を聞き流す。たぶん帝が聞いているだろう。

寝てよ……

「てめえここで会ったが百年目ええええ!!」
ロンゲが叫びながら斬りかかってくる。
古っ。どこで聞いたんだよそんなセリフ。気配見破ったのはさすが
だと思っけど今オレに斬りかかってくるか?無理矢理起こされて超
ご機嫌ナナメのオレに。

捨て身 (笑)

キンッ

ロンゲの剣と蒼の剣が交わる。さすがヴァリアーだな。少し気を抜いたら吹っ飛ばされそうだ。でも強い抜かなきゃこっちのもんだろ。でもオレの場合こいつに負けたことになってるんだよな。気分が悪いことに。そしたら一つ交渉といきますか。

「なあロンゲ。交渉しないか」

顔を近づけてロンゲにだけ聞こえる声で言う。

「ああ？んなことするかああ！！！！」

うるっせーな。これだけ近くにいとウザさうるささ倍増である。

「せっかくザンザスにオレより弱いこと内緒にしてやろうと思ったのに…交渉内容を言う気も失せた。っ」

ロンゲの剣を受け止めてない方のクナイをロンゲの腹目掛けて突き出す。

「！！！！うおおおい、いきなり攻撃たあどいうことだあ！！」

先に攻撃してきたのはそっちだったんだけど。薄笑いながら攻撃を続ける。

「お待ちください蒼様！！」

チエルベツロが蒼とスクアーロの間に入る。

あー。こんな奴らいたっけ。みんな顔が同じ奴ら。すごいよな、ペアルック？ていうか…

「様付けされる筋合いはないと思うんだけど？あんたらが様付けするのはヴァリアーだけじゃなかった？」

「我々はそのような規準で様付けさせていただいている訳ではございません。お強い方には敬意を表しているだけです」

ヴァリアーの奴らよりもアルコバレーノの方がお強い方だと思っけど？ま、いや。

クナイを収めた蒼を見て安心した様子の子エルベツロ。

「ありがとうございます。この続きは同じ属性の守護者同士で戦っていただきます」

おお！ということとは戦うこと決定だな？良かったー。この事を確かめるためにここに来たんだもん！。

「チエルベツロ。一番初めの戦いは誰が何時やるんだ？」

「はい。一番初めの戦いは晴れの守護者で3日後です。」

第36兩

オレ、暴れかける!?(後書き)

あけましておめでとうございませう!!

久しぶりの投稿です!

in 福島です!

マジ寒いです…

次回は番外編いきまーす!!

第37兩

オレ、商店街に行く!!

今日は適当に遊びに出ている。誰とというわけでもなくただ歩いているだけだ。なんか適当に歩いているだけでも周りに知ってる人達がかかる。不思議な事だ。

「何買うかなー。見たらしは絶対10本買う。そしたらあんこ5本ゴマ3本。帝にも買ってつてやるか。帝はーゴマだっけ? あんこだっけ。ゴマでいつか。おじさーん」

屋台の団子屋をのぞいて言う。

「おっ。蒼ちゃんまた来てくれたのか! サービスするよー何買う?」

「まじサービスしてくれんのか! ? んじゃ明日の昼の分も買っちゃおー。ちなみに今何本ずつくらいあるんだ?」

「みたらし40本、あんこ35本、ゴマ38本、ずんだ40本ってところかい」

「けっこーあんだな。あつ、ずんだ新しいんじゃないか?」

「そうなんだよー。よくぞ気づいた!」
そんな他愛もない話をして結局20本、10本、5本、2本という具合だ。

蒼いわく『他の客の事も考えてやった』と言うがそれ以上買われたらもう昼間から店じまいである。

「んじゃおじさんまたな」
また商店街を歩く。

いやー買った買った。明日もこれで生きていける。また帝には怒られるかもしれないけどまあいっか。

そんな事を考えながらこれまた適当に歩いていると後方から知る声
がした。

「お。蒼も買い物か？」

獄寺だ。どうやら少し買い物に出ただけらしく襟の広がった長袖Ｔ
－シャツにジーンズにメガネというラフな格好だ。それにしても：

「隼人。一応中学生なんだ、商店街でタバコはどうかと思うんだが」
目を隼人の吸っているタバコに向けて言う。タバコはおいしいとい
うことを聞いた事はある。でも勧められても吸った事がないもので
いまいち感覚はわからないのだ。意外と言われるが。

「別に誰も言つてこねーからいいんだよ」

それはお前が怖くて誰も言えないだけだと思つ。

とっさに思つた事を必死に口に出ないように押さえ込む。

「そうか」

もう何も言つとかないどころ。

「ていうか相変わらずすげー量だな…」

蒼のぶら下げているビニールを顎でしゃくつて言う。ビニールは半透明で中身はあまり見えないはずなのだがにおいがするらしい。

「んなことない。これでも遠慮したんだ。えつと？…確かみたらしが20本、あんこが10本、ゴマが5本、ずんだが2本だ。」
蒼がどうだ、という態度で言う。

「（それじゃおめーが遠慮しなかったら一週間で世界から団子が消えるぞ）」

今度は獄寺が言葉を押さえ込む番だった。

獄寺と別れ、歩いていると今度は前から知ってる顔が歩いてきた。

「おー！蒼じゃねーか。何してんだ？」

商店街にいるんだから買物に決まっているんじゃないか？ポケな
んだか天然なんだかわからない人に顔を向け、言う。

「買物だ。暇だから歩いていたんだ。武は？」

ヤバイ。まったくおんなじ質問をしてしまった。同レベルではない
か。

「ん？オレか？スポーツ店でバチグロ買ってきたんだ。」

武は蒼の質問には違和感を感じていないらしくビニールを持ち上げ
て言う。

「ハハハッ。蒼はまたみたらし買ったのな」

その後獄寺と同じような言葉を交わし、別れた。

結構いろんな人と会ったし帰るかな。そう思い帰るルートに変える。

ズガンッ

「ブベーーーーッ」

…いやな予感がする。

その音達は蒼の真横の店からした。

ドゴッ

予感的中ー

牛ガキが蒼の顔にヒットしたのだ。牛ガキは蒼の前にポテツと落ちる。おそらくアルコバレーノにまたしばかれたのだろう。

「ガ……マ……ン……」

牛ガキは泣くのを我慢しているようだ。その努力はたたえよう。だが今の蒼にはその感情もぶっ飛んでいる状況だ。

「お、おいランボ！ひいい！誰かにぶつかってるしー！って霧沢さんー！……？」

牛ガキを回収しにきたと思われる沢田。誰かに当たったというだけで焦るといふのにその相手が蒼ということにビビったらしい。

「沢田…まった…てめーかっつー！！」

牛ガキを思いっきり沢田目がけて投げる。

「ぼへー……!!…!!な、何でオレ……」

確かにお前はとぼっちりだ。

その後家に無事帰ってきた蒼。帝に団子の量で怒られ、その後シャワーを浴びる。それでいろいろすっきりした後パソコンで情報集めして一日を過ごすのでした。

第37兩

オレ、商店街に行く!! (後書き)

久々の投稿だあああ!!

やっと書けた…

第38兩

オレ、静かにキレル！

？晴れの守護者の戦いの晩？

「帝！。準備できたか！」

「おう」

「んじゃ行きますか！」

学校についてみるともう全員そろっていた。そんでなんか沢田達が
円陣組んで暑苦しい事してんだけど…ぶっちやけ引くわー…。

蒼と帝は黒いマントをかぶって屋上からそれを眺めていた。正直下
に行つて話しかけられるのがめんどくさいだけなんだけど。

そして晴れの守護者戦が始まった！相手はムエタイの達人でサング
ラスをかけたおっさんだった。おっさんというかおばさんというか
…そこで迷う理由は彼がオカマだからだ。小指を立てて決めポーズ
している。

始めは笹川兄の劣勢だった。それはボクシングのリングがライトで
照らされていたからこれじゃあ目も開けていられないだろう。オカ
マの方はサングラスをかけていたため平気らしい。その後オカマ、
ルッスーリアの膝に埋め込まれた鋼鉄、『メタル・ニー』に苦しま
せられるがそこに現れた京子のおかげでまさに極限の力が出せたよ
うだ。ルッスーリアの『メタル・ニー』を打ち砕いた！晴れて笹川
兄が勝ち、この戦いは沢田側の勝利！

ここまででは良かったのだ。平和に（？）終わるところだった。

ドガアアン！

「コッコッ！！？」「」「」

何事かとみんな音の発信源を見る。相手の不気味な機械、ゴーラ・モスカだ。撃たれたのはルツスーリアだ。

「な、なんで撃つたんだ！？仲間でしょ！？」沢田がザンザスに向かって叫ぶ。

「負けるようなカスはいらねえ」

沢田はもちろん帝も驚いていた。原作で見たとはいえ本当に撃つとは思わなかったのだろう。

「フフフフツ。そっかー。弱いと消すんだねー。ふーん」
帝の横で蒼がつぶやく。帝が疑問に尾思い、蒼の方を向く。
「ひっ」

蒼は満面の笑みで微笑んでいた。普通ならこっ、かわいいとか綺麗とか思うのかもしれないがここ数ヶ月で蒼の性格を熟知した帝にとってその笑みは恐怖としか思えなかった。

「（うっそなんで！？何で怒ってんの？あ、仲間撃つたからか？そ
ういうのマジギレするしなー）」

「帝くん」

「はい!？」

さらに帝をくん付けするときも冗談のときかマジギレの時くらいだ。

「帰ろうか」

「はい…（大空戦の時ザンザス消されるな…）」

その後蒼は部屋にこもり、帝は怖くて近づけなかったとか。

数日がたち、それぞれの戦いがあった。その度に蒼の部屋をのぞく帝だったが。

ドンドンドン

「ああおー！今日嵐の戦いだぞー！はあやあとおー！！！」
こんなに騒がしくドアを叩いているのは蒼の部屋が完全防音だから。いつのまにか改造されていた。おかげで何してんのか全く分からない。時々地響きがするくらいだ。中で何やってんのかめっちゃ気になるけどドアを開けたらカーテンがかかっていてそのカーテンを開けるまでの勇気はなかった。聞いても「修行」の一言。

お母さんは心配なんだああ！はあ、はあ、ま、まあそんな事が続きついに蒼の番が来た。結局守護者の中では最後だった。明日だ、と言うと分かった、とだけ返ってきた。なんで他の言葉は聞こえないのにこれだけ聞こえるかな…。

次の日。帝は勇気を出して蒼の部屋をノックしてみた！偉いぞ帝君
！が。

ドゴオオン

「ぶっ」

ドアごと吹っ飛ばされた。蒼が出てくる。

「待たせた。」

どつちやら準備はばつちりのようだ。
（ああ、後頭部打ったかも…た
んこぶ出来てないかな…）

第38兩

オレ、静かにキれる！（後書き）

遅れてすみません！最近勉強とか忙しくて…

誤字脱字とかあったらよろしく願います！

蒼はどうやらちゃんと戦いに参加してくれるらしい。でも、でもさ…

「待たせたっていうかまず謝ろーよ！？これ小説じゃなかったらオレ死んでたよ！？ねえ！」

「悪い悪い」

そんな事を言いながら学校に向かってく。

帝がちらっと蒼の方を見ると自信に満ちている顔だった。

ああもう、何で当人よりも緊張しなきゃいけないんだよ！！

?? 学校??

?? グラウンド??

こちらはほぼそろっていた。∴双方の風の守護者以外は。

「霧沢さん来てくれるかな? 結局これまでの戦いのときは来てくれなかったし∴」

「あいつは来るぞ。戦うの大好きだからな」

「何で分かるんだよ!」

「オーラだ」

「なにそれー!」

リポーンは独特の笑みを浮かべて言う。ツナは心配で仕方ないらしいが。

「?おおおい!あの女まだかあ!?!」

「しししっ。寝坊じゃねーの?」

「

「両者とも来なかった場合、両者ともふさわしくないと判断します」
チエルベツロが無表情で言う。といてもいつでも無表情だが。

「その心配はないわ」

校門入り口から声がある。ヴァリアー側の風の守護者らしい。白いマントを着込んでいてフードをかぶっていたため顔は見えない。下にロリータ系のミニスカをはいてる事ことは分かるが。

「では沢田綱吉側が1分以内に来ない場合ヴァリアー側の不戦勝となります。」

チエルベツロが腕時計を出して秒針をながめている。

「や、やばいよー!」

「しししっ」

「5秒前。4、3、2、1、「ちよつと待てやああ!」「」

ザクッ
チエルベツ口の腕時計にクナイが刺さる。その場の全員がとっさにクナイの降ってきた屋上の方を見上げる。

「ほーら、ぎりぎりじゃねーか！」

「でも間に合ったから結果オーライってことで！」

「一・秒・前で、な！お前『5分前行動』っての知らねーな！？小学校では決められた時間の5分前には行動するってのを習うんだよ！」

「んな事知ってる！しょうがないだろ木に上りたかつたんだよ！悪いか！」

「悪いわ！」

蒼と帝が屋上から飛び降りてきて言い合っている。

「…時間に間に合った為戦闘を許可します」

「チッ」

ヴァリアー側から明らかな舌打ちが聞こえてくる。聞こえてるっつーの。蒼はみたらしを一本くわえ、ヴァリアーを睨む。

…あれ？ロンゲがいる。どついう事だ？帝の方を見る。するとすか

さず寄ってきて事情を言う。なんか跳ね馬の治療が早く終わったらしい。だからってなんているんだ？まあいつか。いるんだし。いる事は変えらんないし。

「ルールを説明します。場所は校舎の全フロアとなります。今回はボス以外は全員参加となります」

「なんで!？」

「風の守護者の使命が『時に現れ時に消え、全てを巻き込む竜巻』だからです。」

「…ただ単に巻き込んでるだけの気がするんだけど…」

「何か言ったか沢田」

「い、いえ何も!」

「…説明を続けます。他の守護者の方は相手のリングを奪ってください。風の守護者同士は戦ってはけません。」

「なにそれ!？みんな戦った後で疲れてるのに!」

「辞退していただいても結構です」

「十代目!オレは平気です!」

「オレも出るぜ、ツナ」

山本が沢田の肩に手をおいて言う。

「ふ、二人がそう言うならいいけど…」

「そして他の守護者の方同士でも戦ってはけません。それでは皆さん校舎へどうぞ」

ついに風の守護者の戦いが幕を開ける。

第39巻

風の守護者の戦い NO.1 (後書き)

次ついに戦いです！戦いの描写苦手なんですよね…

がんばります…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7854w/>

転生した先は...リボーン！？

2012年1月14日13時46分発行